
Fate/crossover

XXX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/crossover

【Nコード】

N3727Z

【作者名】

XXX

【あらすじ】

ありとあらゆる願いを叶える事ができる万能の釜『聖杯』。その願望機を

求め、数十人の魔術師が殺し合う一つの戦い『聖杯戦争』……ある者は

愛する者を救う為、ある者は己が殺しの悦楽を味わう為、ある者は名誉を欲し、またある者は絶望した世界を変える為に戦う。さあ！戦いの幕は

上がり今、一つの願望機を巡る物語が動き出す！

Fate/crossover 用語解説(前書き)

本作はFateの二次創作にして、様々なキャラクター達がサーヴァントとなって

召喚されるクロスオーバー作品でもあります。

設定、世界観などが大きく異なっているので、そういったモノが嫌いな方は

閲覧しないことをお勧めします。

【聖杯】

偉大にして世界最後の4人の魔術師の1人

『アレイスター・クロウリー』が数百年の月日を経て創り上げた

『万能の釜』であり、聖遺物の聖杯とはまた別の物。

ありとあらゆる願いが叶うとされ、

『聖杯戦争』を引き起こす引き金となった。

【聖杯戦争】

上記の聖杯を求める魔術師たちの戦争である。

魔術師 ウィザード と言っても一部を置いて、

根っからの魔術師ではなく、元はごく普通に生活していた一般人である。

アレイスターから魔術回路を貰う事で初めて魔術師になると同時に聖杯戦争の参加者としての資格を得る。

尚、この魔術回路が何からの理由で破損した場合はサーヴァントがいようと敗退者になってしまう。

【アレイスター・クロウリー】

数多に滅び去った魔術師。その最後の4人の一人にして、偉大な魔術師。聖杯を創った張本人でもある。

彼については多くの謎が存在するが、分かっている事は彼が不老不死であり、途方も無い時間を生きていると言う事だけ……

【魔術師 ウィザード】

奇跡の体現者であり、常軌を逸した奇跡の現象・事象を現実化させる者達の総称。かつては数多くの魔術師が存在したが70年前に魔術師の間で起こった『魔術戦争』により魔術師の家系が絶えてしまい、家系を持たない魔術師も同じように滅び去った。

今では4人の偉大な魔術師が生き残り、ひっそりと暮らすだけの現状となっている。

【サーヴァント】

並行世界において偉大な功績を残した異能の力を持つ者達の総称。彼等は死後、『英霊の座』と呼ばれる世界へ導かれ、未来永劫その地へ留まる。

だがサーヴァントとして召喚されるのなら話は別となる。

サーヴァントの召喚というのは聖杯の力と召喚者である魔術師の魔力『オド』によって行われ、魔術師はオドをサーヴァントに供給することでサーヴァントを現世へと留める役目を担う。

サーヴァントにはそれぞれのクラスがあり
セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、
キャスター、バーサーカー、アヴェンジャー、ファイター、
クリーチャーの10のクラスが存在する。

そして全てのサーヴァントには『宝具』と呼ばれるモノがある。
自身を象徴する武器であり、能力であったり、
またはそれ以外のモノであったりもするので、
宝具がすべて武器とは限らない。

一年前 聖杯戦争への序章 / 3体のサーヴァント召喚

ある所に1人の男がいた。男は誰よりも『平和』を愛し、その為に多くの命をその手で消し去ると同時に多くの命を救った。

10人の内、多数の9人を救う為少数である1を犠牲にする。まさに簡単な話だった。

簡単な話だが……とても残酷な選択でもあった。

それでも男は必要な時に感情を殺し、大勢の人々を救った。

そしてその大勢の人々を救う為に少数の人々を手にかけて……そんなことを繰り返して行く中で

男は全ての人間を救済したいと思った。だがそれは不可能に近く、幻想に近かった。

どんなに願おうと『多数を生かす為に少数を殺す』という世界の一つのシステムが

ある限り、喜びと同時に悲劇が起こる。

男は不条理な世界を憎みつつ絶望していった。

そんな男の前に『彼』は現れた。

彼は自らを『魔術師 ウィザード』と名乗り、万能の願望機『聖杯』とそれを巡って戦う

『聖杯戦争』を語った。そして彼は問うた。

『貴方の幻想同然の願い、叶えたいのであれば一年後に行われる聖杯戦争に参加してみる気はありますか？ もし参加するのであれば、私は貴方を聖杯戦争の参加者『魔術師』と認め、その証たる『魔術回路』を差し上げます。どうしますか？』

男は即答した。自らが抱く幻想に近い夢。

それを現実のモノにできるのであれば、どんなに危険な道でも迷わず進む……男はそれだけの覚悟があり、揺るぎよしの無い『決意』の炎が強く、その瞳に灯っていた。

『では……貴方を一年後に行われる聖杯戦争の参加者と認め、証たる魔術回路を授けましょう』

『神代市』。そこはかつて前回の聖杯戦争が行われた地であり、再び行われる聖杯戦争…すなわち『第3次聖杯戦争』の舞台となる場所である。

その街にある一つの屋敷に魔術師戦争で生き残った偉大な魔術師の1人『蘆夜 土岐臣』は暮らしていた。彼もまた『第3回聖杯戦争』に参加する魔術師であり、万能の願望機たる聖杯に託す願いは自分の後継者にして娘である『蘆夜 燐香』に強力な魔力を与える事である。

今や奇跡の体現者たる魔術師は土岐臣と聖杯戦争の首謀者であるアレイスターを含めた4人の偉大な魔術師のみ…アレイスターはともかく、土岐臣を含めた3人の魔術師は愛する人を娶り、自らの後継者に後代における魔術師復興の要を担わせている。

いつしか彼等が自分達と同じように魔術を極めていき、『偉大な魔術師』となって魔術師の時代を今一度築きあげるその日の為に…

故に土岐臣はその要の中心には自分の娘が相応しいと考え、その為に『大きな力』…すなわち願望機によって生み出された強力な魔力を娘に与えようと考えたの

だ。

「準備は整った。あとはこの私がサーヴァントを召喚し、一年後に行われる聖杯戦争に勝つだけ……」

土岐臣は自室の机のイスに腰掛け、木製の机に置かれた箱を見ながらそう言った。

その箱にはアレイスターから送られた一枚のペンタクル 六亡星の描かれたカードがあった。

サーヴァント召喚に必要な物で、これを召喚陣の中心に置き詠唱することで初めてサーヴァントを召喚することができる。

そして魔力の籠った上等な『魔道遺物』さえあれば、高確率で最強に属するサーヴァントを

召喚できる。その為の『魔道遺物』は既に準備しており、後は召喚陣を描いて詠唱。

サーヴァントを召喚するだけである。

「もしこれで……目当ての最高ランクのサーヴァントが現界すればその時点で私……いや、

『私達』の勝利は決まったも同然か」

誰に言うわけでもなく、土岐臣の独り言はそのまま虚空へと消えて

いった……

そこはとある倉庫街の一角。1人の男はそこで召喚陣を描き、ペンタクルの描かれたカードを召喚陣の中心に置き、詠唱を始めた。倉庫の中なのか…薄暗いせいで男の姿を視認することができない。

「告げる」

「汝の身は我が下に」

「我が命運は汝の武にあり」

「聖杯の誘いに抗うことなく従い」

「この意、この理に同意せしめるなら応えよ」

「誓いを此処に」

「我は常世全ての善となる者」

「我は常世全ての悪を敷く者」

「汝、狂いし気を身に纏う者！」

「出でよ！ 英霊の座より来たれ！」

詠唱を唱え終わった瞬間、凄まじい光が倉庫全体を包み込み、すべてが真っ白に染まる。そして少しずつ光が弱まっていき、召喚陣から溢れ出る煙と共にそれは姿を現した。

『白い服を着た少女』……それがサーヴァントの姿を確認した男の最初の感想だった。白い服に白い帽子を被ったまさに白装束の少女は男を見つめ、そして言い様のない無垢な笑みで男に質問した。

「サーヴァント『バーサーカー』、召喚に応じ来ちゃいました。貴方が私のマスターでいいのかな？」

男がバーサーカーを召喚したその同時刻。
土岐臣も自身のサーヴァントを召喚する為、詠唱を行なおうとしていた。

「告げる」

「汝の身は我が下に」

「私の運命は汝の武にあり」

「聖杯の誘いに抗うことなく従い」

「我に力を貸し与えるのならば、応えたまわん！」

「契約の誓いをここに」

「私は常世全ての善となる者」

「私は常世全ての悪を敷く者」

「汝、絶対の力を振るいし者なり！」

「出でよ！ 英霊の座より来たれ！」

輝きを増していった召喚陣は詠唱が終わると同時に煙を残し消え去り、

その消え去った煙の中から一つの影が姿を現した。

「我が名は創世王シャドームーン…聖杯と貴様によって招かれた者にして、

此度の聖杯戦争において『ライダー』クラスをもって現界した。貴様がこの俺のマスターで

あることに相違、否定はあるまいな？」

「ここに聞け」

「汝の身は我が下に」

「我の運命と信頼は汝の武にあり」

「我が問いに、聖杯の導きに抗うことなく従い」

「我が剣となり、盾となるならば応えよ」

「契約の儀をここに」

「我は常世全ての善となる者」

「我は常世全ての悪と成りし者」

「英霊の座より、来たれ！」

幻想に等しい夢を抱く男… 『上谷 紫騎』は、詠唱し自らのサーヴ
アントを呼び出す。
そして現われた者は……

「この私、サーヴァント『ファイター』に現界した者が問う。
貴方がこの私をこの世界へと招き入れたマスターですか？」

黒き衣装を身に纏った、鬨気溢れる1人の少女だった……

聖杯戦争数日前 それぞれの動向／キャスター召喚

聖杯戦争開始まで残り6日となった。未だいくつかの空席はあるが当日には間に合うだろう。

開催日が近い為、聖杯戦争の監督役を務める男『ジェイス・グローブ』がアレイスターにより派遣され、日本の街の一つにして聖杯戦争の戦場となる地『神代市』に来訪した。

この聖杯戦争は『戦争』という言葉が用いられているモノの、ちゃんとしたルールが敷かれておりそのルールに反した魔術師は強制的に聖杯戦争から降ろされてしまう。

ルールがある以上、当然の事ながら『審判』の任を担う者が必要になる。

それが聖杯戦争における『監督役』である。監督役は聖杯戦争において絶対的な権限を有し、いかなる魔術師でも監督役に逆らう事は出来ない。

かくして聖杯戦争の準備は大半も終わり、残すは空席を満席にするのみとなった……

魔術師 ウィザード は4人の偉大な魔術師以外、確かに滅び去った……だが魔術師でなくとも魔術を使う者達が存在する。その一つとして上げられるのが『黒呪術師』である。

別称として『妖術使い』とも言われ、主に悪魔や魔族の力を借りて魔術を行使用する術者だ。

大半の黒呪術師は自らが生み出した妖魔、もしくは使用する黒呪術を『神を超える』ほどに強く昇華させるのが最大の目標である。だがそんな簡単且つ思い通りに行く筈も無い。その道程は困難と苦難を極めていた。

そんな中…かの偉大な魔術師『アレイスター・クロウリー』がある。黒呪術師の名家を訪れ、ある誘いを持ちかけて来た。

『聖杯戦争という、魔術師同士の殺し合いに参加してみる気はありませんか？』

彼が話した『聖杯』名を借りた万能の釜にして願望機なる代物に黒呪術師の名家

『ローク・アルメスク家』の現当主は、ひどく魅了されアレイスターの誘いを承諾した。

その数週間後。サーヴァント召喚に必要な魔道遺物が届き、召喚する為の『召喚陣』も

地下の部屋に用意してある。あとはアレイスターから貰ったサーヴァント召喚に必要な
もう一つの物：ペンタクルの描かれた一枚のカード。

これを召喚陣の中心に置いて詠唱すればサーヴァントを召喚する事ができる。

さて……これですべての準備は整い、後は『召喚の儀式』が予定されている日を待つばかり。

黒く長い髪をした釣り眼の男：『ローク・アルメスク・ローディアス』は口元を吊り上げ
醜悪な笑みを浮かばせる。

「ククク……私は数多の黒呪術師が成し得なかった偉業を果たし、多くの黒呪術師に
偉大な黒呪術師の称号『大黒天 ダーク・ヘブン』の名を轟かせるのだ：クククッ！」

自室の窓の外を眺めながら笑う彼に、彼の盟友にして聖杯戦争で彼を支援、援護する

金髪の中性的な顔立ちの男『ジャック・フィーラー』は少しばかり苦笑した感じで口を開いた。

「しかしあの有名な『聖遺物』の名を冠する万能の釜にして願望機か、俄には信じ難いな」

「そう思うのも無理はない。『いかなる願いを叶える』……という

事は、
魔術師が体現する奇跡の中で『未知の領域』と言っても過言ではない。
しかし『あの方』……アレイスター・クロウリーはそれを現実の物にしてしまった」

彼の言う通り、魔術師とは『奇跡の体現者』である物の『奇跡のジヤンル』において

『未知の領域』というモノが存在する。『いかなる願いを叶える』
という

奇跡もまた、未知の領域の一つである。

『未知の領域』であるが故にアレイスターは数百年もの年月を経て、
万能の釜に願望機である

『聖杯』を創り上げたのだ。下手をすれば2000か4000年は
掛かっただろう。

「何はともあれ、私は必ず勝ってみせるさ。我が名家の誇りと自らの自尊心に賭けてな」

「ふっ、ならば俺はそんなお前に尽くそう。友としてな」

「…ありがとうジャック、期待している」

二人はそう言い互いに熱い握手を交わした。

【蘆夜邸 土岐臣の自室】

「もうすぐ聖杯戦争が始まる……まだ空席があるが、それも時間の問題だろう。」

妻と娘は隣街に非難させたし、これで心置きなく戦える」

土岐臣はワインを傾け、窓の外に広がる神代市の風景を見つめながらそう呟いた。

すると誰かがドアをノックし土岐臣は自らの部屋に入ることを許可した。

ドアが開かれると同時に現われたのは1人の男……黒いスーツを身に纏い、少しばかり

長い髪を後頭部に束ねた髪型をしている。男は無愛想な雰囲気醸し出しながら土岐臣に近付き、

その口から言葉を紡ぎ出す。

「召喚は完了しました。何の問題もないので、このまま聖杯戦争に出しても問題はありません」

「ご苦労だったね、『騎瑠亜』君」

騎瑠亜と呼ばれた男は土岐臣に頭を下げる。

彼は2年前に土岐臣に弟子入りした魔術師見習い ウィザード・ペイジ、『神崎 騎瑠亜』。

嘗ては魔術師を討伐する『異端狩り』の任を担う『代行者』にして、その実力は一流を超え、数多の功績と名誉を築き上げた。

だが心から満足する事は決してなく、今まで築き上げた物をかなぐり捨て

真に心から満足できる物……魔術師の道『魔導』にその身を委ねた。

そして彼自身の判断は間違っていないかった。

魔導というモノは彼の心を満たし、彼にとって素晴らしいと思えるモノだった。

「では、君のサーヴァントを見せて貰えるかな？」

『既に此処にいます……』

どこからエコーがかった声が響き渡り、1人のサーヴァントが騎瑠亜の後ろに現われた。

『アヴェンジャー』……すなわち復讐者のクラスをもって現界した騎瑠亜のサーヴァントの姿は青い髪に青いスーツ、その上を裁判官が着るあの正装で羽織っている。

一見すると可笑しな格好だが、アヴェンジャーから流れ出る魔力のオーラは

ライダーほどではないものの、かなりの高位ランクのサーヴァント

である事が頷ける。

「ほう。君はアヴェンジャーか」

「はい、アヴェンジャーに属するサーヴァントにして『ガリレアン・マローン』と言います。

此度の聖杯戦争では私…そして私のマスター共々、土岐様とライダー様のご支援及びご協力をさせて頂きます」

「ふむ。期待していますよ、アヴェンジャー」

「御意」

『ほう……劣等種にしては中々やるようだな』

アヴェンジャー同様エコーがかった声が再び部屋に響き渡り、今度は銀色で昆虫を思わせるような鎧に身を包んだ男が土岐臣の隣に現われ、緑色の複眼でアヴェンジャーを見据える。すぐさま土岐臣はワインを机に置き立ち上がり、礼をする形で頭を下げる。

「おはようございます。創世王シャドームーン様」

「挨拶など今はいらん、それよりその青い髪の男がお前のサーヴァントか？」

「そうだ。アヴェンジャーのクラスに現界している」

礼儀正しい口調で接する土岐臣とは違い、騎瑠亜はいつもの口調でライダーに接している。

するとアヴェンジャーがライダーに頭を下げる。

「わざわざ私のような者を目視する為に、ご足労頂き、感謝します。創世王様……私、アヴェンジャーは全身全霊をもって貴方様を支援させて頂きます故、以降……よろしくお願い致します」

「フン。使えるのなら使つてやろうアヴェンジャー。」

俺以外の連中など所詮、有象無象に湧いてくる劣等種に過ぎんが……お前の力は素晴らしい

故に、貴様を俺の配下として認めてくれよう。有難く思え」

「はい。恐縮でございます」

「さて……互いの面会も終わった所で、今後の方針を決めましょう」

我々が……この聖杯戦争に勝つ為に。

黒呪術師の名家『ローク・アルメスク家』の現当主『ローク・アルメスク・ローディアス』には
十数人の生徒がおり、彼等は黒呪術師の教育機関『暁の天秤』で黒呪術を磨きながら勉学に日夜
励んでいる。その生徒に彼女、赤い髪をツインテールに纏め上げた女子生徒『ミルキース』はいた。
彼女は非常に優秀でそれこそ、ローディアスを超える希有の黒呪術師になるだろうと言われた。

そんな彼女には一つの目標があり、それが『魔術と武術』の混合であつた。

その論文をローディアスに見せ、返って来た答えは……

『くだらん。君ほどの黒呪術師が『魔術と武術』の混合だと？

あああ！なんと性質が悪い過ぎるジョークか……いいか、君は後世の時代を担う

最高の黒呪術師だ。それに関してはこの私が認めるのだから間違いはない。なればこそ、

そのような悪い冗談は言わないでくれ、ある意味そこいらの妄想よりも酷い』

彼女にとって侮辱にも程がある言い分だつた。

彼女は魔術の利点すべてと武術の利点すべてを掛け合わせる事で、最高の術式が完成すると

論文にそう提示している。だが魔術こそが何をもってしても優秀と

言う、古き風潮のせい
彼女の論文もローディアスにとっては『妄想』『愚考』『悪い冗談』
としか、捉えられなかった。

『クソツ！ 魔術だけが何物よりも優秀で尊いモノだと疑わない狂
信者どもめ！

何が何でも分かせてやる！！ 武術もまた優秀なモノでこの二つ
を合わせれば

最高の術式となり、素晴らしい運用ができると思いき知らしめてやる
！！』

そんな彼女の願望と信念に應えるように彼……アレイスター・クロ
ウリーが彼女の自宅に

来訪し『聖杯』と日本の神代市で行われる聖杯の所有者を決める闘
争の儀式『聖杯戦争』に

ついて語り始めた。そしてその内容にミルクィス・アンジェリカは
一つの希望を見出し、
聖杯戦争への参加を承諾した。

そしてサーヴァントの召喚に必要なペンタクルの描かれた一枚の力
ードと、
魔術師となるに必要な魔術回路がアレイスターから与えられ、これ
で彼女も

正式な聖杯戦争の参加者となった。

神代市の繁華街……そこに灰色をした髪をスタイリッシュヘアで整えた男、

『上谷 紫騎』はタバコを吹かしながら歩いていた。

行き先は、とあるホテルの一室。

ホテル内に入った彼は受付を済ませ目的の一室502の部屋へ向かう。

そのドアの前に立った彼はノックし、返答を待つ。

やがてドアが開かれ黒いスーツ着た大柄な体格をしたスキンヘッドの男

『セバス・ウォルター』が現われる。

ウォルターは紫騎の姿を見て頭を下げると同時に彼を部屋の中へと招き入れる。

部屋にはもう1人、ポニーテールの女性『朱熹』がいた。彼女の隣には二つのベッドがあり、

その一つに銃器の数々が揃っている。それらの武器はすべて紫騎が数年前から殺しの為に使った

モノで、彼はこれらを使い多くの数の人間を助けると同時に少ない数の人間の命を奪って来た。

そして今回は……誰かを殺す為でなく、自分が愛する『妻』と信頼するサーヴァントを助ける為に使うと。彼はそう心に決めている。

紫騎はすべての武器の点検を終えると同時に二人、ウォルターと朱熹を見る。

「さっそく情報収集を始める……二人とも、異論は無いな？」

彼の言葉に二人は異論、反論を上げることなく首を縦に振るう。

【神代市 とある廃屋】

そこはレンガで造られた一軒の廃屋。既に家主は亡くなっており、以来誰も住んでいないせいで荒れ果ててしまい近寄る者もない始末。

そんな場所こそ彼女……ミルキース・アンジェリカにとっては秘密裏に

サーヴァントを召喚できる場所だった。

彼女はアレイスターから貰ったカードを自ら描いた召喚陣の中心に置き、

魔道遺物を召喚陣の前に置く。あとは詠唱しサーヴァントを召喚するだけ。

彼女は召喚する為の詠唱を唱え、終わると同時に1人のサーヴァン

トが召喚陣から
その姿を現した。

ロツクミュージシャンのような風貌に血の様に赤い深紅の瞳。
威圧感と圧倒感を共に発生させるその姿は、まさに『魔王』と称するに相応しいモノだった。

やがてその重々しい口が開かれ、言葉が紡ぎだされた。

「今此処に問う！ 汝が我をこの世界に招き寄せた魔術師で相違ないな？」

「……………」

「うん？ おーい、お主。私の言葉をちゃんと聞いているか？」

「え？ あ、ああそうだ！！ 私がお前のマスター『ミルクィス・アンジェリカ』だ！」

「ふむ。これで契約は完了……………という事だな」

男はそう言い、改めて自分の名とクラス名を紹介した。

「我は『吸血鬼』という異名を持ちしファンガイア族の王2代目に
して、

全ての魔族の頂点に君臨せし『魔帝』ヴラド・アルカードなり！
此度の聖杯戦争において

『キャスター』のクラスをもって現界した。ミルクィスとやら…お
主が我のマスターであるのなら

我はそれに応え、お主にこの聖杯戦争においての勝利を齎そうぞ！

ハツハツハツハツハツハッハ！」

豪快に笑う彼：ヴラド・アルカード。その彼を召喚した彼女
ミルキースはただ、その光景に呆気に取られるしか術がなかった：

……

聖杯戦争数日前 それぞれの動向ノキャスター召喚（後書き）

どうも皆さん、XXXです！

今回は前回に続き、今日中に更新できて何よりです。

Fate/crossoverの世界はどうでした？ 自分的には
うまく

書けているつもりですが、『本当は駄目なんじゃないか？』と思っ
てしまう

ことが度々あります（汗）。でも精一杯頑張って書いていくつもり
なので

『感想』、『アドバイス』、『ここが分からない』と言う点があれば

コメントして頂けると嬉しい限りです。

それではまた次回に！

聖杯戦争1日目 ファイターとアサシン/最初の戦い

神代市の繁華街。そこに黒い女性用スーツを着た『ファイター』のクラスに属する

紫騎のサーヴァント『キュアブラック』と幼き頃から紫騎を支え続けた数少ない人間にして

彼が誰よりも愛する妻『三日月 漣^{みお}』はいた。彼女等は紫騎よりも遅く神代市に到着し、

街の偵察と称してテンションを上げながら観光を味わっていた。

と言っても、ソレは漣だけの話し……彼女を護衛しているキュアブラックは溜息しか吐けない

ばかりか、少しばかり呆れている。何故なら既に聖杯戦争は始まっており、いつ敵の奇襲を

受けるのか分かった物ではないからだ。とは言え、今後の方針はまだ決まっていし予定もない。

つまり方針が固まるまでは、こうして暇を潰している他に何も無いワケだ。

「ねえ、『ファイター』。次はあそこに行ってみない？」

「はああ漣、いくら暇を持て余しているからと言って無用心に街を散策するのは危険です。

聖杯戦争はもう始まっているんです…なればこそ、待機している方が得策だと思います。」

「もう、ファイターのケチ」

「ケチとかそういう言うことではありません、当然の事を言っているだけですよ」

『ケチ』とう言葉に少し怒ったのか、ファイターは若干拗ねた感じでそう言う。

子供のような彼女の様子に思わず笑みを浮かべる澪。

「ごめんごめん、でも折角来たんだから楽しんで罰は当たらないと思うけど？」

「それは、そうですが……」

「そ・れ・に！ 私には貴方がいるから全然平気だし、むしろ安心できるわ」

「……………わかりました。街を見て周りましょう、何かあったら私が全力で貴方を守ります」

「ふふ、ありがとうファイター」

溜息を吐くファイターに嬉しそうに笑顔を向ける澪。

そんな彼女にファイターも笑みを浮かべ、彼女と共に人込みの中へと消えていった。

あれから長い時間が過ぎ去り、時間帯は昼から星が点々と輝く夜と
なった。

漣とファイターは鉄橋の近くの川沿いに立って綺麗な星空を眺めて
いた。

「綺麗ね……」

「そうですね……やはり世界が違えど、星空の美しさというのは変
わらないんですね」

「ええ、きっとそうですね……」

夜空に散らばった星々の輝きは神秘的なモノで、二人は時間を忘れ
ずっと夜空を眺め続けていた。

だがある一つの気配を二人同時に感知した事により、星空観賞の時
間はあっという間に終わった。

その気配は紛れもなくサーヴァントのモノでそう遠くはない。

しかもどうやら誘っているようだ。

どのクラスに属しているのかは、気配の元となっているサーヴァン
トの姿を確認しない限りは

決して分からないだろう。しかしわざわざ敵である自分たちを誘う
という事は、畏である確率が

非常に高く、敵がどんな奇策をもって仕掛けて来るのか分からない。なればこそ、迂闊にこの場を動くワケにはいかない。

だが彼女……『漣』は自信満々な表情で『この挑戦、受けて立ちましよう!』と言った。

彼女のその言葉はハッキリ言って無謀……だがそれと同時に勇敢でもあり、ファイター……『キュアブラック』に自らの覚悟を見せ付けたようなモノだった。

漣の覚悟を見せられた以上、ファイター 拳士 として彼女に背中を預けて戦うしかない。

そして二人は敵のサーヴァントの誘いに乗り、場所を変えてサーヴァントの気配を追った。

二人が向かった場所は、神代市にある森林公園の広場。

円形の形状をしておりその中心には15mのクネクネとした鉄のモ

二ユメント像があり、その周りに三つのベンチがあるといった感じで、それ以外の特徴は見られない普通の広場だった。だが空気は張り詰め、どこか重い印象を受ける。

すると気配の元であるサーヴァントが姿を現し、ファイターと遷を見据えた。

その姿は黒いマントに包まれ、その下にはタイトのようなモノを身に纏っている。

厳格そうな感じだがどこか清々しい印象を受ける整った顔。青みがかった黒髪をライオンのたてがみのように逆立て、オールバックの髪型にした男だった。

やがて男の口から言葉が紡がれた。

「その鬨気とサーヴァントとしての気配から察するに、ファイターのサーヴァントですか？」

「そうですね。そう言う貴方の格好はまさしく、貴方が『アサシン』であることの証ですね？」

「フフッ、いかにも。私は此度の聖杯戦争において『アサシン』のクラスをもって現界した

サーヴァント……真名は『鬼鮫』といいます」

「しかし何故、アサシンとあろう者がこんなマネを？ どう考えても暗殺者の……」

「殺り方ではない。確かにそう思うのも無理はありませんね」

薄く笑いながら言うアサシンは少しばかり顔をしかめ、改めてフアイターを見る。

その眼には絶対的な自信と意志が見え隠れしていた。

「アサシンの座に据えられたとはいえ……コレでも立派な戦士。貴方の相手として、不足は無いと思いますよ？」

「わかりました……貴方の挑戦を受け、尋常に勝負しましょう」

「ありがとうございます……では、参りましょう」

アサシンが右腕を上げると同時に右手の周りの空間が歪み捻じ曲がる。

そして一本の大刀が現われた。それは本当に刀なのかと思うほど、大きく。分厚く。幅が広い。

正直なところ刀と言うよりは『平べったい金棒』と言う方が正しいのかもしれない。

だがそれは間違いなく刀で彼の宝具だった。しかし刀身の部分は白い包帯のようなモノで

グルグルと巻かれ、刃の部分が見えていない。

やがて自然に包帯のようなモノが解かれていき、大刀の刃部分が露となった。

それはあまりに異形な刀で、奇妙なモノだった。

大きくコブのような鱗に包まれ、その鱗が逆立つと同時に刀全体がまるで生きているのか

のように脈動し、先端から鋭い歯を有した口が開いた。

「！！ッ」

「あ…アサシン、それは一体…！？ッ」

「フッフ…驚きました？　これは『鮫肌』という大刀なんです…
…まあ貴方達からすれば
大刀より妖刀の方がしつくり来ますか？」

確かに鬼鮫の謂う通りだ。

明らかにソレは『異形』であり『異常』、尚且つおぞましいものだ
った。

こんなものが大刀言えるのか？もし違うなら、それは妖刀と称する
に相応しいだろう。

「水遁・水鮫弾！」

アサシンの口から大量の水が吐き出され、それが鮫を形作り鋭い口
を開け

ファイターに向かってきた。奇妙な攻撃に驚くが一瞬の内に表情を
戻し、自らの両腕に

黒き稲妻を纏わせ水でできた数匹の鮫を拳一つで撃退し、撃退され
た鮫はそのまま普通の水に
戻った。

この黒き稲妻こそ、ファイターの宝具『漆黒の光の雷撃』ブラックサンダーである。元は敵を最終的に滅殺する為の必殺の技だったが、ファイターのクラスのサーヴァントとして

召喚された為、『必殺の一撃』から打撃による攻撃を高めると同時に相手の攻撃を防ぎ受け流す

『防具』の籠手であり、『武器』としてのガントレットでもある。

数匹の水の鮫をすべて打ち倒したファイターはアサシンに向かい、ブラックサンダーを宿した拳でアサシンの顔面を射抜こうとするがアサシンは瞬時にしゃがみ込んでソレを回避し、鮫肌でファイターの上半身と下半身を二つに裂けようとする。

だがそんな簡単に切り裂かれるほどファイターも未熟者ではない。凄まじい程の鍛錬を積み重ね

培ってきたその体が反射的に両腕同様ブラックサンダーの宿った両足を動かし、

迫り来る鮫肌の刃を捕らえ一気に蹴り出しアサシンとの距離を取った。

「これは……………驚きました。両手で刀をキャッチし攻撃を防ぐ『真剣白羽取り』というのは知っていますが……………手ではなく足で私の剣筋を捕らえるとは感服しました。」

流星ですねファイター、体術での戦法はお手の物というわけですか」

「それを謂うなら、貴方の剣筋も見事なモノでした。禍々しさあれど、その禍々しさと同等の清澄さを感じさせます……………」

貴方は素晴らしいですね」

ファイターの言葉に、表情では薄ら笑みを浮かべたままだが、内心は苦笑していた。

「（素晴らしい……か。やはり私はろくでもない人間、でもなかったようですな）」

ご賞賛ありがとうございます。できれば長く貴方と覇を競い合いたいのですが……生憎、事情と言うモノがあるので、次の一撃で仕留めさせて頂きます！」

アサシンの魔力が鮫肌へ注がれ、鮫肌が魔力に狂喜するかのような勢いで鱗が先程よりも逆立ち、暴れるように刀身が動き回る。そして忍たる自らの驚異的な脚力でファイターへ接近し、先程よりも断然速い剣筋でファイターを捉え、その首を落とそうとする。

間一髪の所でキュアブラックは5mくらいまで後退し、ブラックサnderの宿った両腕を構えるが……

ブシューウウウー！！

「なっ！？　ぐウウツ！　ウウツ……」

突然胸が切り裂かれ、赤い血が吹き出る。
ソレと同時に激痛が走りファイターは思わず、敵の前で膝を地面に
付いてしまう。

「ぐっ…な、何故…：確かに掠りはした…：だがその程度で！」

「そう思っているのなら、すぐに訂正した方がいいですよ？」

「！！！！ そんな…魔力が減っている！？」

「私の大刀、鮫肌は斬るのではなく『削る』のです。故にほんの少
し掠った程度で

重傷を負う事もあります…：そして削ったサーヴァントの魔力を喰
らうんですよ、コレが」

「それが貴方の宝具『鮫肌』の能力というワケですか」

ファイターは激痛に耐えながらも立ち上がり、拳を構える。

その様子に遷は心配の色を顔に出していた。見るからに出血量は多
量ではないが、

傷は浅いとも謂えず、少し深めのようなだ。

それに魔力も少し多めに喰われており、どう考えてもファイターの
方が劣勢しており

このまま行けば傷のせいで体力が消耗してしまいアサシンの勝算が

上がってしまう。

できることなら回復魔術でファイターの傷を癒したいが、彼女は魔術師でもなければ

黒呪術師でもない為、魔術を行使することができない。

だが、彼女を…ファイターを援護する事は可能だった。

「！ッ」

身の危険を察知し、アサシンは後方へ一気に退避する。

するとアサシンのいた位置に3本の『黒鍵』という聖堂教会の代行者が異端討伐に使用する剣が突き刺さった。

「もしや只者ではないと、思っていたのですが……予想は的中しましたか。

貴方は魔術師を含め、多くの異端とされる存在たちの敵…聖堂教会の代行者ですね？」

「元、ただどね。流石にサーヴァント相手じゃ一撃で仕留めるのは無理みたいね」

一瞬触発の状況。

ファイターが溼に下がるよう進言しようとしたその時、

聖杯戦争1日目 キャスターとミルクース/戦場介入

それは時間を過去へ遡り、聖杯戦争開始4日目のことだった。

「なあ小娘。この街は中々の活気があると思わないか？ 人間達がこうして元気に生きている様子は実に好ましいぞ！」

「あんたねえ……」

彼女：ミルクースは2日前に召喚したキャスターこと3代目ファンガイア王こと、
魔帝ヴラド・アルカードを連れて街に駆り出していた。

理由は私情単純、『街を見てみたい』という彼からのリクエストだった。

最初、彼女はキャスターの意見に反論していたがどうしても行きたいと引かず、
ついに根負けし外出を許してしまった。

神代市の街の様子を見たヴラドは興奮し、そのせいでいろいろと騒ぎを起こす度に
ミルクースの心労は募っていった。

「ム、なんだその元気の無い感じと雰囲気は！ もっとシャキッとしろ！」

「誰のせいでこんなに疲れてると思ってんのよ！ はあああ」

キヤスターを召喚した時、その溢れるばかりの魔力に当たりクジを引けたと思っただが、

今になってそれが間違いであると実感させられた。いや、確かにその強さは誇っていいものだ。

問題は強さでなくその行動だった。

街に出て最初の行動は売り物のパソコン（情報収集の為に）を買うことなく、

そのまま持ち逃げしようとする泥棒紛いな行為を働き、その次はコンビニでただ普通に

タバコを吸っていたサラリーマンを殴り倒し、『公衆の面前で有害物質を振り撒くとはけしからん！

貴様のような者がいるから社会はどんどん荒んで行くのだ！』などと説教し、またその次は……

いろいろとありすぎてこれ以上は言えないが『いろいろとヤバかった』と、謂っておこう。

それ程までにこのサーヴァントの行動は破天荒で常軌を逸していた。

「大体！ お前吸血鬼なんだから！ 何で吸血鬼が昼間っから出歩いてんのよ！」

日の光に耐性があるからって元気過ぎでしょッ!？」

「あのなあ、小娘…お前が言う吸血鬼ってのは『人の生き血を吸う』
『太陽光が苦手』

『蝙蝠や狼に変身する』『十字架とニンニクが苦手』っていう奴だ
る？それはあくまで

この世界の吸血鬼であり、我の属する吸血鬼ではない。そもそも吸
血鬼というのは我の世界では

人間どもが勝手に作った異名であり、召喚の際にも言ったが『フ
ンガイア族』というのが正しい
呼び名だ。理解できたか？小娘」

「じゃ、じゃあ……ファンガイアってというのは何なの？」

「ふむ、ファンガイアと言うのは人間が誕生する前から地球に命の
根を張り、

繁栄していた知的生命体だ。しかしその起源は『世界の闇』という
大いなる意志にして神なる

力によつて産み落とされたのが始まりだ。世界の闇より生まれたの
は決して我々ファンガイア
だけではなかった。

人々に『人狼』と呼ばれた『ウルフェン族』、

『半漁人』や『海の司教』と呼ばれた『マーマン族』、

『龍王』と呼ばれ大地と天空を跋扈した『ドラゴン族』、

他にも様々な種族が『世界の闇』より『闇の眷属』として生まれ、
それらは『魔族』と称されるようになった……ま、ざっと説明すれ
ばこんな感じだろ」

そう言っただけでキヤスターは公園のベンチに座り込み、ふうつと息を零す。それに釣られてミルクィスも息を零すが、キヤスターより数十倍の疲労感が感じられる。当然と謂えばそうであろう。

街に駆り出して数時間、その数時間の中に色々と騒ぎや問題を起こしている時点で、

彼女が疲労を感じるのには仕方がないことだった。

あまりに破天荒、あまりに非常識、それ故常軌を逸している。そんな彼に彼女が疲れないワケはなかった。

「はああ、まあファンガイアと貴方の世界においての『魔族』の事は分かった。

で？この後どうすんの？また街を見て周るの？」

「ふむ。まあ大体、街の様子については良く理解できたし、後は敵のサーヴァントが集まった

ところを一気にぶちのめす！それができなかつたらまた別の手を考えるでしょう」

無茶苦茶かつ大雑把な計画だった。いや計画と言う言葉を使うのは滑稽かもしれないほど

愚作に等しかった。そんな彼に苛立ちが込み上げるミルクィスだったが冷静になり、

改めてアルカードを見据えた。

「その愚作に等しい計画を実行するのは構わないけど、その前にお前の力を見せてみなさい。

私はまだ、貴方の力の証たる宝具を目の当たりにしていないわ」

「ほほう！ なればこそ、我が宝具を見てみたいと？ いいだろう

……その眼に焼きつけよ！」

今の時刻は夕暮れ、つまり5時33分。

公園には誰にもいないし人払いの結界及びこの公園への干渉をできなくする

結界を張り巡らしている。なのでこの場を目撃される心配は皆無と
いっていい。

「変身！」

その言葉と同時にアルカードの腰に黒いベルトが現われ装着される。
そして一匹の黒い蝙蝠が現われ、アルカードが翳した右手に噛み付く。

蝙蝠のキバから『アクティブフォース 活性魔力』が注入され、
段々とアルカードの姿が変貌していく。

変貌し終えたアルカードの姿はまさに、地獄の悪魔どもを統率する
『漆黒の魔王』へと変わる。

その尋常じゃない魔力のオーラにミルクィスは思わず、腰を抜かし
てしまった。

どっと嫌な汗が噴き出る……だがアルカードはそんなミルクィスを

他所に

ダークキバはこの姿の説明に入った。

「この宝具は見ての通り鎧。名を『黒き魔の栄光　ダークキバ』
という。」

この鎧は人間には到底使いこなせん代物でな……着ようとした瞬間、
人間のライフエナジーを
吸い取られ、ほんの一瞬で失命する。そんな魔性なる宝具なのだ」

「た、確かにそうね……」

生唾を飲み込んでその鎧を活目して見るが、やはり際立っているの
はその禍々しい外見と魔力。
それが一体どのような意味を含んでいるかなど容易に想像が出来た。

「それと、これ以外にあと二つの宝具がある」

「ええッ！　まだあんの!？」

「当たり前だろ。まあ確かに宝具というのは原則として一つ……だが
が中には単一でなく、
複数持ち合わせているサーヴァントも少なくない。でその二つなん
だが……一つはここでは
不向きだからもう一つだけを見せよう。ハアアアッ!!」

キャスターのいる位置から蝙蝠をモチーフにした紋章が出現し、キ
ャスターの足元が

水面のように揺らぐと同時に一つの剣が姿を現した。それは黒く闇を体現したような
ダークキバと対を成すが如く、黄金に輝き光を体現しているような
そんな感じがした。

「名は『選ばれし皇帝の剣 ザンバット・ソード』……私の鍛冶職人の盟友から譲り受けた
彼の最高傑作にして、我が体の一部といっても過言ではない」

「すごい……そのダークキバって謂う宝具もすごいけど……その剣はそれ以上だわ!!」

「はっはっはっはっは！ それは当然の事。我が盟友の鍛冶屋としての腕は神ですら
負かしてしまうほどのモノ」

そう言うキャスターの声には、若干ながら悲しみが含まれていたが、余計な詮索はいけないと
思ったミルキースはキャスターにある質問を投げかけてみた。

「その剣と剣を創った鍛冶職人が凄いのは分かった……でもその剣は宝具であるから、
何か能力があるんだろ？」

「ああ、もちろん。このザンバットには万が一に折れたり破損した場合は自然界の魔力……つまり
マナを摂取し自己修復することができる。加えてこの剣は斬った敵

の血を一滴でも吸って
しまえばその敵の能力や技を使用することが可能だ」

「……！ッ……ここまで私を驚かせるなんて……アンタを召喚したのは間違いじゃなかったわね」

「これで我がどれほど強力なサーヴァントなのか、分かってくれたか？」

変身を解除し、ザンバットを担ぎながらニカッと笑うアルカードに
不覚にも一瞬ばかり
ドキッとしてしまったが何とか平常心を装い、頬を赤く染めるも不
敵な笑みを浮かべる。

「う、うん！ これなら私のサーヴァントとして申し分ない……さ
すがよキャスター！
今回の聖杯戦争、この私に勝利を捧げる！」

「おうとも！ 我が言葉に偽りなし！」

マスターであるミルクィスの問いにキャスターは高らかにそう言い
切った。

それから日は経ち、いよいよ聖杯戦争当日。

しかも当日からサーヴァントの気配を二つも感知したキャスターに、ミルキースは『戦っているかもしれない』という予測をしキャスターの意見を聞こうとしたが…

「まだ二人だけだが丁度いい、叩いて潰す！」

と、あの計画とっていいのか迷うほどの愚策を実行するつもりのようなのだ。

だがキャスターの力ならば、それは案外愚策ではなく容易なことなのかもしれない。

そう思った彼女は無謀かもしれないが彼の提案に乗る事にした。

「で、そのまま普通に足で2体のサーヴァントがいるところまで行くの？」

「いや、我には『乗り物』がある。こう見えても騎乗スキルに関してはライダーのクラスの二の次とっていいぞ？」

ここで説明しておくが『スキル』とは、生前に元から持っていたも

のではなく、
聖杯によって与えられる追加能力である。騎乗スキル、単独行動スキル、鬼道スキル、
魔力放出スキル、神魔獣使役スキル、気配遮断スキル、気配察知スキル、神性スキル、
水棲スキル、異形スキル、怪力スキル、魔性スキル、以上の全部で
12個のスキルが存在する。

『気配察知』に関してはすべてのサーヴァントがもっている共通スキルで、それ以外は
サーヴァントのによって違う。そしてキャスターが持っているスキルは『神魔獣使役スキル』と
『水棲スキル』を有しており、ランクは『神魔獣使役スキル』がA、
『水棲スキル』はB。

『神魔獣使役スキル』は神獣、もしくは魔獣を召喚し使役するもの。召喚できる神獣、魔獣がかなりの強さをもっていたのなら戦闘においても使えるし
強いだけでなく隠密行動も可能なら、まさに謂う事なしだろう。

そして『水棲スキル』について。
これはそのままの通り、水の抵抗を一切受けず活動する事の出来るモノで、
スキルのランクが高ければ魔力以外のすべてのステータスが上昇する。

うまく水のある場所に誘き寄せれば戦局は有利になるだろう。

話を戻し、キャスターの『乗り物』という言葉に疑問を浮かべるミルキース。

それを察したのか：キャスターは『見せてやるう』といい、ミルキースと共に神代市の川にある鉄橋へと向かった。

「ここでアンタの謂う『乗り物』を出すの？」

「もちろんだ。大きさや召喚の際の魔力の余波を考えれば、あの拠点であるレンガの家でやる行つワケにはいかん…」

そういつてキャスターは自らの宝具ザンバットソードを取り出す。そしてホルダーから竜を象ったフェッスルを取り、ザンバットの鍔の装飾である4枚の翼をもつ蝙蝠の口にフェッスルを付ける。

その瞬間、重々しく。

それでいて盛大な音色が響き渡り、その音色が天に一筋の横線を描く。

やがてそれは徐々に広がっていき最終的にはガパツと開いた。

そしてそこから現われるのは一頭の『竜』。

竜は東洋で見られる蛇のような姿ではなく、西洋のような怪獣に近い感じだ。

やがてそれが二人の目の前に着地し、その威風堂々とした雰囲気と天空の覇者に相応しい

すべてを圧倒させる覇気。その姿は雰囲気と覇気に反してユニークな物だった。

頭は炎のように紅い色彩をし、ヤギのように湾曲した角を有してい

る。

脚部である4本の足はしつかりとし、鈍重そうだがそれだけ力があると想像できる。

そして肝心の胴体は……『城』である。

城といっても日本や東洋のモノではなく西洋だが、城その物というよりは、

城の一角部分というのが正しいだろう。何はともあれ『竜』を召喚した時点で

宝具を使わなくとも勝てる見込みができた。

「では、参ろうか……聖杯戦争最初の戦いが始まっている戦場へな」

「うん！」

二人は城の一角と合体した竜……『キャツスルハウス・ドラゴン』に乗り込む。

二人が乗り込んだのを確認したドランは4枚の真紅の翼を広げ、戦場へと飛び立った。

「うっむ。中々やるなアア」

「確かに……ファイターの方も厄介だけど、アサシンのあの宝具は厄介だ……」

二人は今、キャッスルハウス・ドランの中にある大部屋でドランの眼で見た光景を

映し出す不思議な絵画からファイターとアサシンの戦いを見ていた。

しかも、ファイターのマスターと思わしき女性は聖堂教会の元代行者らしい。

状況は今の所は拮抗していた。当初とアサシンが戦い、ファイターが負傷…本来なら回復魔法を使うところだが、何故かできないらしくファイターの加勢に回っている。

「もう少し様子を見ようキャスター……うまくいけばアサシンかファイターが

宝具を開放するかもしれない。そうならば「いや、このまま戦いに介入する！」えっ!?!」

ミルクィスの意見を無視し、肉声ではなく念話で戦いへの介入を命

聖杯戦争1日目 創世王と魔帝/バーサーカー乱入

アサシン、ファイター、そしてファイターのマスターである彼女『三日月 溇』は突然現われた異様な竜に困惑し同時に警戒していた。

それともう一つ警戒すべき者がいた。それは竜ことドランの屋根の上に立っている漆黒の魔王、キャスターだ。キャスターは溇とアサシンの間に位置し、左右の二人を見ながら高らかに叫んだ。

「我は統べての魔を率いる『魔帝 ヴラド・アルカード』である！此度の聖杯戦争において、キャスターのクラスをもって現界した次第である。

そして我は！ 今此処で貴様等に問う！ 二人とも我に聖杯を譲り我が軍門に下る気はないか？ さすればお前達を我が臣下にして盟友として迎い入れる所存である！」

高らかにそう叫ぶキャスターに、アサシンも溇も、苦痛に顔を歪めていたファイターも呆気に取られた。

『随分と下らない事を抜かしたな、キャスター……』

一時静寂を極めた場を打ち破るように発せられた、エコーがかつた男の声。

やがて近くにある18mの木の天辺に銀色の昆虫を模した鎧を身に纏った

ライダーのサーヴァント『シャドームーン』がその姿を現し、眼下にいる全員に冷たい視線を送る。

「ん？ お前は……えーっと……………『ライター』のクラスだったか？」

「『ライダー』だっつーの！？ 本気でボケてんのかお前！」

盛大なキャスターのボケに、今度ドラムから出てきたミルクィスが盛大なツツコミをかます。

その様子が癪だったのか……ライダーの背後に銀色に輝く月が出現する。もちろん月と言っても

宇宙に浮かぶ月とは大きさも質も異なるモノ……だが月のマナを使っている時点でそれは確かに

月だった。シャドームーンの生み出した月は全部で4つ。

その大きさは小学校の運動会でよく見る大玉の3倍はあり、月から無数の剣の切っ先が出てきた。

これこそライダーの宝具……月のマナで疑似的な月を創り出し、その月を生前に自らが集めた数々の刀剣宝庫のゲートとする『月の剣群 ムーン・ステイ』。

そしてその標準は確実にキャスターとそのマスターを捉えていた。

「我が拜謁の栄を無断で浴し、そのような下賤で愚劣な台詞を吐き捨てる貴様には

この創世王自らが処断を下す……………『死ね』」

それは無慈悲で冷酷な処刑の宣言。その宣言を受けたキャスターに計7本の刀剣の数々が襲いかかり、キャスターのいた場所が激しく削れ激しい衝撃と爆発を生み出す。

だがキャスターは無事だった……………瞬時に変身しザンバットソードを召喚、襲い来る刀剣の軍勢をザンバットソード一本で難なく防ぎ切ったのだ。

「いきなりの挨拶だなああ、ライダーよ。お前のいた生前の世界ではこういった挨拶しかないのか？ だとしたら悲しいことだなライダー」

「貴様の戯言はもういい、お前のような劣等種如きの声は俺の耳にとつて害悪にしかならん。早々に塵となりこの場から退場しろ」

再び三つの月から無数の剣の切っ先が出現し、標的であるキャスターに狙いを定めている。

だがキャスターはそれよりも早くザンバットソードを振り翳し、ライダーの首を斬り落とそうと

横一直線に斬りかかる。それをライダーは二つ目の宝具である紅い

刀身のサーベル、
サタンサーベルで防ぎ、両者の剣がぶつかり合い激しい金属音を奏
でる。

突然の事であった為、僅かな隙を作ってしまったい力押しでそのまま負
けてしまい、

木の天辺からその木の側に着地する。だが当の本人は怒り心頭とい
った感じで同じように地面に
着地したキャスターを睨みつけ、怒号の一喝を放つ。

「誰よりも何よりも、天を仰ぎ見てはそれに属するこの俺を下賤な
る大地に立たせるか！」

サタンサーベルを掲げ、凄まじい速さでキャスターへ向かうライダ
ー。

そして一気に斬りかかり、ついでに強烈な蹴りを見舞つと同時に
サタンサーベルから赤い電撃を放つ。

「ぐうぐうぐうッ!!! ッッ…ハアアアアアアアアアアアアアアアア
アア!!!」

強烈な赤い電撃にダメージを受けながらもザンバットソードを振り
翳し、

ライダーに斬りかかろうとする。だがライダーは咄嗟にムーン・ス
テイを発動させ

無数の剣によつての一斉射撃の手段をとつた。効果は絶大でキャス

ターを瞬殺できなかったが
かなりのダメージを受けており、宝具である鎧『ダークキバ』もボロボロになっている。

しかし忘れてはいけない事がある。彼にはマスターがおり今、そのマスターである
ミルキースは魔術を得意とし、初歩的な『回復魔術』もお手の物なのだ。

「！ツツ チツ！ キャスターのマスターの仕業か」

「傷が癒えていく……」

「傷は完治させた！存分にやるんだ！」

「でかしたぞ、小娘！」

傷とダメージがなくなったキャスターはザンバットを振るい、ライダーも同時に振るう。

激しい剣と剣とが、剣戟と剣戟が交じり合い、それが衝撃波となつて地面を削り深く抉る。

二人の剣戟は互角……このままでは消耗戦になるだけである。

ならば互いの宝具の力を最大限に解放し、一気にケリをつけるしかない。

同時にそう判断した二人は自分達の宝具を開帳しようとするが……

『！！！！！！』

その場にいる全員が異様な気配を感じ取り、ソレが蔓延する広場の中心に佇むモニユメント……その上に佇む一人の白い服に白い帽子を着た少女に注目が行く。その少女を見た瞬間、全員がまったくの同一意見を出さず、心中に浮かばせて悟った。

この少女はサーヴァント……そしてそのクラスは………
『バーサーカー』！！！！

そんな驚愕の視線を気にせず、眼下に見えるライダーを見つめては嘲笑を浮かべ、卑下するような視線をライダーに送っていた。

もちろんライダーの性格上それは決して見過ごせるモノではなく、殺意の籠った視線をモニユメントの天辺にいるバーサーカーに向けて自らの憤怒を言い放った。

「貴様……誰の許しを得て俺にそのような視線を向ける？ 身の程を弁えぬ狂犬めがッ！！」

「えー？ なんの事かなー？ 私は至って普通に君の事を見てただけだよ？」

「……ッ ど、どういうことですか……これは。バーサーカーが……」

「言葉を……喋った!？」

アサシン、ファイターが驚愕した様子でそう言う。一方のキャスターとそのマスターは驚愕こそすれ、それを口に出さずただライダーとバーサーカーの様子を伺っている。

バーサーカーに現界したサーヴァントは基本的に理性を失い、知能も若干低下しているのが普通である。しかし今、自分たちが見ているバーサーカーは第1回及び

第2回のバーサーカーを見比べえても常軌を逸しており、言葉を話しているところから無い筈の理性が伺える。

しかも彼女は、狂戦士とは思えないどこにでもいる少女の笑顔が浮かんでいる。

シャドームーンの尋常じゃない殺気と怒気を受けているにも関わらず……

「ほざくな狂犬め……我にそのような眼を向けるなど愚かしいことだ。

せめて散り様で貴様自身を昇華させよ」

何気ない言葉と共に数百と言う数の様々な剣がバーサーカーの少女めがけ

襲いかかり、味気なく佇んでいたモニュメントは数秒もせず塵と同然と化す……その速過ぎる

剣の群れはダークキバも避けられず防御をとらせたほど……だが少女は防御体制をとらなかつた。

だとすればモニュメント同様、塵と化しているのが妥当であつた。

しかし……

「いきなり攻撃するなんて酷いなああ。私まだ何もしてないのに」

平然とした少女の声が響き渡つた。正体は黙々と沸き起こる土煙の中からだつた。

土煙が晴れると同時にマスターとサーヴァントたちは、またも驚愕の色を含んだ表情を露にする。

そこにいたのは無傷同然のバーサーカーの姿。あの数百の剣の群れはバーサーカーの命を刈り取る

ことができず、その使命を無駄に終わらせた事を物語っていた。

「せつかちな人は嫌いだよ？」

と、可愛らしく彼女はそう言うがライダーを除き、その他全員は戦慄していた。

「あ、あのバーサーカー……どうやってあの無数の剣を……」

「簡単だ、『かわしたんだよ』」

ミルキースの疑問にキャスターが答える。

あの時、普通の人間である漣とミルキースには分からなかったが、サーヴァント達は見ていた。

数百の剣の刃を彼女は余裕な表情と雰囲気で『かわした』のだ。

キャスターでさえ避けきれず、防ぐ事を選択をさせたあの刃の群れを……

「我が剣の軍勢を避け切るとは、ククッ！ おもしろい！ 先程の無礼は赦そう。

その代わりとしてもっと面白いモノを……うん？……………チツ、無粋なことを」

ライダーは宝具を使った必殺奥義を繰り出そうとするが、絶対強制命令権である『令呪』を

使用され、仕方なく自らの宝具をムーン・ステイへとしまった。

「俺のマスターからの命令でな。『この場は退避せよ』……………本来な

「こんな下らぬ命令など
無視するところだが……令呪を使つての命令だ。さすがに俺でも逆
らえん」

「ふーん…そつか。それじゃあしょうがない、また今度戦おうね？」

「ふん。それまでに貴様が生き残っていたならな……」

それだけ言い残しガシャツ、ガシャツ、といった足音を立て、ゆっ
くりと
銀色の粒子となつていくような感じで霊体化しながら、その場を去
つて行つた。

「あーあ、せつかくできそうな人と戦えるかと思つたのに…うん？」

少しばかり溜息を吐き、愚痴を零す彼女の視界にふと、自らの自
己治癒能力で何とか
傷を癒したキュアブラックが入る。

「ああ……ああアああ……」

「??？」

自分を見て、驚愕したような表情をするバーサーカーに疑問を抱く
が、次の瞬間から

聖杯戦争1日目 創世王と魔帝ノバーサーカー乱入（後書き）

レナが……いろいろなと半端ねエエエエエエエ！！！

自分でそうさせたにも関わらず、叫ばずにはられない

トリプルエックス

XXXXです（汗）

感想やアドバイス待ってます！

魔力が失われる。

魔力さえ失えば宝具もただの鈍へと劣化する。

チツと舌打ちを鳴らし、ファイターを庇う様にして立つアサシンを睨むバーサーカー。

「共闘でもするつもり？」

「いえいえ。あくまで私は彼女と正々堂々勝負し、決着を着けたいだけです。

つまり彼女は私の獲物、それを横取りするのは構いませんが……その場合はこの私の相手をしてからにして貰いたいですねえ」

「……………いいわ。この場は引いてあげる。……………じゃあね」

そういつて彼女、バーサーカーは霊体化しその場から去って行った。残るはアサシン、ファイター、そしてのキャスターの3人だけとなった。

「キャスター、貴方はどうするんですか？」

「うーん。まあ先程の質問の応えは、また今度としよう。お前は どうするんだ？」

「……………先程私のマスターから退避命令が出たので、彼女との決着は

またの機会にします」

「ふむ、そうか。ではさらばだ、ファイターにアサシンよ」

キャスターはそう言い、何か叫んで自分に文句言ってるミルキースの額にデコピンを一発かまして担ぎ、キャッスルドラン・ハウスに乗り込んで去って行った。

そしてアサシンはいつの間にか消えていた。残っているのは漣とファイターのみ。

漣はファイターに近寄ってアサシンに削られた傷の具合を見た。

「すごい……治ってる……」

「一応サーヴァントの自然治癒能力は並みの人間より高いので、それなりの時間を得ればなんとか回復できます」

「そうなんだ……でもよかった。私じゃ回復魔術は使えないから……」

「いいえ、お気になさらず」

漣を気遣い、大丈夫というファイター。

確かに傷は完治したが受けたダメージは回復できないのが自然治癒の欠点と言える。

だがそれを溲の前では言わず、表情にも出さない……それがファイターなりの優しさであった。

場所は変わり、倉庫街の一角に男はいた。

男は白い髪に血を入れたような赤い瞳を持ち、服装は白い長袖のシヤツ一枚に

ジーンズのズボンという、ありきたりなラフな格好をしている。

そんな彼の目の前に白い服を着た少女……バーサーカーがやってきた。

「とりあえず、何でいきなり暴走したのか聞いてもいいか？」

男は少し呆れたように謂ってバーサーカーを見据える。

バーサーカーは笑みを浮かべて応える。

「ありやりや、見たなの？」

「ああ。一つも見逃さないで傍観したさ、で？」

「で？って何、私が暴走した理由？」

「……………お前はあのファイターのサーヴァントを知っているのか？」

鋭い男の視線が鋭い矢のように彼女に突き刺さる。

だが彼女は『心底どうでもいい』といった表情で男を見据える。

「知ってる…でもあの子は私のこと憶えてなかったみたい」

「……………どういう関係なんだ、彼女とは…」

「そうだねええ何て言ったらいいのかな？ まあちょっとした縁
ね」

「ちょっとした縁……………っていうだけで暴走するなんて可笑しいだろ」

「女の子には秘密があるものなの！」

彼女の返答には、もはや溜息が出せない。男はそう思い今度は別の質問を試みた。

「アサシン、ファイター、キャスター、ライダーの4人はお前から見てどうだった？」

「うーん……アサシンは相手の魔力を喰う宝具があるから厄介ね、ファイターは接近戦に特化してるから遠距離攻撃は効果抜群。キャスターは……よく分からないけど、ライダーは結構できると思うよ」

「厄介なのはどれも同じか。ファイターはお前の謂う通り遠距離攻撃は効果抜群に違いな。だがそれは本人もよく理解しているし、あの防具であり武器として身に纏っている黒い稲妻の宝具をうまく使えば遠距離からの攻撃でも対処はできる。でもそれ以上にアサシンとファイターそしてライダーが厄介だ」

「ま、とりあえず今は様子見でいいんじゃないかな？ 敵同士が戦い合えばそれだけ情報も収集できて今後の戦闘に役立つし」

「その戦い合うサーヴァントとマスターが俺達じゃないことを祈るよ……」

そういつて男…ふたつたいが府堂對我は、倉庫街の一角である倉庫の扉に立ち、冷たい声音で言葉を紡ぎだした。

「出て来い。いるのは分かって……一体誰のサーヴァントだ」

對我の言葉に応えるように1人のサーヴァントがその姿を現した。

それと同時に一つの短剣が對我めがけ放たれるが、それをレナの疑似宝具である鉈で防がれる。

短剣を投げ付けたサーヴァント……それは中世の貴族を思わせる公爵のような服装をし、両手合わせ5つの短剣をもっていた。

「?? チャーム(魅了)の魔術……ふーん、変わったのを持っているんだね」

「そんなことより応えろ、お前は誰のサーヴァントだ?」

「それを応えらなくても? そんな馬鹿なサーヴァントはいないですよ」

そういつてまた短剣を飛ばす男。

その短剣を意に介さず、鉈を振り上げ斬り落とすバーサーカー。

一見すると芸が無い。ただ投げるだけで他に何もしてこない……。

これでは意味が無いし時間の無駄だ。だが男の顔には不敵な笑みが張り付き、

それが崩れていない様子を見れば、何か奇策がありそうだ。

「いつまで短剣を投げ続ける気なの? そんなことしたって意味が無いって言うのが

分からないのかな? かな?」

「いえいえ。ちゃんとは意味がありますよ……」拡散する凶毒の息吹
ポイズン・シルフィ 』」

突如短剣が破裂し、猛毒の気体が胡散する……どうやら毒を使って
バーサーカーと
そのマスターを殺す気だろう。

「なめるなアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアア！！！！」

レナの鎧によって生じた風圧が毒の気体を押し退け、最終的には消
滅させる。

だが男の顔に張り付いた余裕かつ勝ち誇ったような笑みは一向に崩
れず、
むしろ増したように見えてしまう。

それにバーサーカーは怒り 狂化 を発動、自分のマスターである
對我の大幅な魔力を
消費させる。鎧を使った我流の剣術の数々に対し、男は冷静に対処
して、

敵であるバーサーカーの動きを見極めている。

「っと！ クッ、避けるだけで精一杯とは……末恐ろしい」

一見すると男はバーサーカーの攻撃を余裕に避けているように見えるが、実際は違う。

ほんの少しでも油断を見せれば狩られてしまう為、攻撃に集中できない……つまり、

バーサーカーの攻撃は敵の攻撃を許さず封じ込めている状態なのだ。

「さっきから避けてばかりで、何もしてこないなんて……つまんなあぁーい」

「それをさしているのは貴方でしょうがッ！」

ごく普通な女の子のようにつまんなそうな顔をするバーサーカーに男はそう言いながらも

バーサーカーの攻撃を見極め避け続けている。

「じゃあね、とっと死んでくれないかな？」

恐ろしい程の無表情を顔に貼り付けてそう言う彼女は、

宝具の鉞『あの日の真実 トウル・ズ・トワイライト』に魔力を注ぎ構えを取る。

どうやら必殺奥義を放つ気をらしい。男の顔にあった僅かな余裕が消え去り、その場から

退避しよう試みる……が……

「鈍間さん 『絆を紡ぐ蒼き獄炎 インフェルノ・ブルー』！」

「!!」

繰り返されるのは蒼き炎の斬撃。
すべてを燃し尽くす獄炎の一撃……それは男を飲み込み、男は叫ぶ暇もなく灰へと変わる。

「お馬鹿さんだねえ、相手の力も見極めないでノコノコ挑んでくるなんて……そういう人から

消えていくんだよ？ 聖杯戦争に限らず、すべての戦いにおいてね」

そういつて宝具をパイプに戻し、對我と共に倉庫の中へと入っていった……

【数時間後 蘆夜低】

「しかし……よくまあ、あの狂犬の宝具を喰らって生きて帰れたな」

「いやはや、流石の僕もアレは焦りましたよ」

蘆夜邸の部屋の一室。そこには、ソファアに座り足を組んでいる銀髪
のシヨートヘアの青年

『シャドームーン』とバーサーカーの宝具を喰らって消滅した男……
『ヴェノマニア・サテリアジス』がいた。

「それで？ 使い魔の気配はあったのか？」

「はい。使い魔の気配がいくつかあったので、あの光景を何人かの
マスターが
目撃している筈です」

「そうか。とりあえず計画の第一段階は成功した、というわけか……
……」

この聖杯戦争はあらゆる事態・状況・可能性を予測し、精密な計画
を立てるのも必要である。
より精密な計画が勝利へと繋がるからだ。サーヴァント同士を競わ
せるだけがこの聖杯戦争の
全てではない、むしろ軍事計略のような策を練る事もまた聖杯戦争
なのだ。

そして土岐臣の計画における『第一段階』は、次の通りとなってい
る。

まず、アヴェンジャーであるマーロンの宝具『大罪の器たち』ギル

ティ・デバイス』に
よりマーションを含めた『七つの大罪』を司る七人の英霊の内、6人
を二次召喚し使役する。
そしてその内1人を敵のサーヴァントと戦わせ、最終的には『死ん
だように』演出させる。

この神代市全域には何人かのマスターが放った使い魔が、そこらじ
ゆうに蔓延っている。

そして、すべてのマスターが敵対するマスターの居場所を使い魔で
監視している筈。

それはバーサーカー陣営も同じで、彼のいた倉庫街には無数の使い
魔が潜んでいた。

バーサーカー陣営を監視する為に放たれた使い魔であるのならあの
光景を使い魔の眼を通して

他のマスターが傍観し、こう思うだろう。

『愚かにも無策で特攻同然の行為を起こし、自らの危機を招いたサ
ーヴァントは破滅した。

これでこの聖杯戦争において、初日早々一組のマスターとサーヴァ
ントが脱落した』つと……

つまり、計画の第一段階とは他のマスターとそのサーヴァントたち
に『一組目』が

脱落したという認識を刷り込ませる事なのである。

そしてバーサーカーに殺されたサーヴァントのクラスが『アヴェンジャー』であるという事は、マスターがもっている『ステータス透視能力』において判明するだろう。

従って『脱落した一組』アヴェンジャー陣営』という図式が出来上がる。

アヴェンジャーを死んだと思い込ませれば、マーロンを含める七人のアヴェンジャーたちの役目である『隠密活動』並び『諜報活動』を開始する。

これが土岐臣の企てた計画の『第一段階』……残る『第二段階』『第三段階』についてはまだその時ではないので、使うことは『その時』が来るまでないだろう。

「ま、この程度の策は少しばかり頭のキレる奴なら簡単に思いつく手だ。」

残る『第二』と『第三』はどのような内容になっているのか……フツ、少し興味がある」

「…何はともあれ、第一段階は成功。我々は残り二つの段階が来るまで」

『諜報活動』兼『隠密活動』を続けます」

「うむ。そういった委細の方は任せる…」

そういつて霊体化して消えるシャドームーンことライダーに、サテリアジスは嘆息を吐く。

あの時、バーサーカーの宝具を回避できたのは自分自身を干渉不能の毒の気体にさせる

『毒を秘めた味 リビドー・フレーバー』という能力系宝具があった。こそだった。

もしあの場で宝具を開帳していなかったら、間違いなくあの青き獄炎の餌食になっていただろう。

そう考えると未恐ろしい。

「……さて、マロンさん所へ行きますか……」

そういつて立ち上がると同時に霊体化させ、部屋を後にした……

場所は変わり、廃墟同然の古寺にアサシンとそのマスターである茶髪のポニーテールの女性が
仏壇の前に座り込み、女性タバコを吹かしながらアサシンに問う。

「バーサーカーによって1体のサーヴァントが死んだ……クラスはステータスを確認した結果
アヴェンジャーっつーことが判明したんだが、どうにもコイツの行動……臭うんだよなああ」

「考えすぎでは？ 魔術師というものにも『愚者』に等しい者もいます。

ならばただ単にその『愚者』が愚行を犯して失敗した、というのが普通なのでは？」

アサシンの言葉に、女性はふうっとなバコの煙を吐き出し、改めてアサシンを見据える。

「確かにそう考えるのが自然なんだけどねえ……これも乙女の勘ってやつかな？」

「いや、30代のマスターが乙女なんて「黙れ」……すみません」

尋常ではない女性の殺気に黙ってしまうアサシン。
女性はやれやれといった感じで立ち上がると、アサシンにこう告げる。

「私はちよつと調べて来るよ。アンタは霊体化して影から私を守ってチヨードい」

「わかりました……」

女性：『道東 香水』はそう言ってタバコを吹かしながら
夜の街へと駆り出していった……。

キャラクターファイルNo.1 ファイター陣営

【神谷^{かみや} 紫騎^{しき}】

年齢 / 25歳

髪型 / 灰色のスタイリッシュヘア

説明 / 70年前に起きた魔術師による大戦『魔術戦争』によって滅亡した魔術師の名家

『ゼーレス家』の生き残り。本来なら既に年寄りになっているのだが、彼自身が瀕死の重傷を

負った際、不老の秘薬（不死はない為、不死身ではない）を飲んだ事で肉体年齢が25歳のまま

停止している。誰よりも戦いや戦争と言うモノを経験し、その結果として平和と秩序を誰よりも愛するようになった。

『10人を助ける為に1人を犠牲に残りの9人を救う』

そんな信念を掲げ『犠牲による平和作り』を続けた彼の人生は茨の道へであり、

奈落の底のような暗雲の道そのモノだった。

今回の聖杯戦争で彼が願うのは『犠牲なき平和』。

【三日月 零】
みかつぎ みお

年齢 / 23歳

髪型 / 長い黒のストレート

説明 / 幼少の頃は、聖堂教会の代行者としての道を早くにも歩み、
『大聖卿』と謳われるほどの
功績を受けた。しかし1人の男『紫騎』との出会いにより、それま
での彼女の人生は
大きく変貌した。

そして彼についていく事を決め、聖堂教会を逸脱。行く先々で教会
の者や同じ代行者から
汚名と罵声を受けながらも彼が行く奈落の底のような地獄とも言え
る道に付き従う。

後に結婚し、3歳になる娘と2歳になる息子を授かる。

【朱 薫】
あまこ

年齢 / 15歳

特徴／オレンジ色のポニーテール

説明／中国人。8歳の時に紫騎に拾われ、紫騎とウォルターの師事
の元
数多の戦闘技術を身につける。両親は紛争に巻き込まれ死去してい
る。

【セバス・ウォルター】

年齢／????

特徴／3mに達する身長とソレ相応のデカイ体格

説明／紫騎が偶然に生み出したホムンクルス。

軽く人間を超える身体能力と五感を有し、通常のホムンクルスより
遥かに超寿命。

無表情で無口だが仲間思いで面倒見がいい。

【キュアブラック】

特徴/ボーイッシュな髪型と耳に付けたハート型のピアス

ステータス/筋力A 魔力A 耐久B 宝具A+

技能/神性スキルA 気配察知スキルC 魔力放出スキルA

宝具/ブラックサンダー【漆黒の稲妻】キュアブラックの防具であり武器でもある

黒い雷の宝具。本来は敵対する存在に向けて発射される一撃必殺であつたが、彼女自身が

ファイターのクラスに現界した為に防具と武器、両方の特性を有するモノへと変化した。

必殺奥義の際は、本来の一撃必殺としての姿に戻り、対象を滅殺する。

説明/かつて世界を救った伝説の戦士『プリキュア』の1人。

幾度も世界を救った後に普通の生活を送り、その生涯を終えた。聖

杯に託す願いは

特に無いが、召喚に応じたのは『自分と同等、あるいはそれ以上の相手と戦ってみたい』

という戦士としての性であるのと、マスターの紫騎とその妻である澪の願いを

成就させたいという思いから。

キャラクターファイルNo.1 ファイター陣営(後書き)

大体、分かって貰えればOKだと思います。

聖杯戦争2日目 アーチャーの挑戦/炎の弓兵

聖杯戦争が始まって2日目、未だ姿を見せない三大騎士クラス称される

『セイバー』『アーチャー』『ランサー』の三騎と異形なるサーヴァント『クリーチャー』の

所在地は他のマスターたちが使い魔を放って監視しているが、現時点で動きを見せておらず。

未だに穴蔵を決め込んでいる。

そんな状況を良しとしない1人のサーヴァントがいた……『キャスター』だ。

朝早くミルクィス連れ出してキャツスルドラン・ハウスに乗り込み、

神代市の街を散策しているが成果は無し。

ちなみにキャツスルドラン・ハウスには『気配遮断』と『魔術迷彩』を施されている。

一般人はおろか、サーヴァントでさえ見つける事は不可能に近い。なので一般人と敵……

両方に気付かれる事は皆無に等しいだろう。

「ふーむ……『セイバー』『アーチャー』『ランサー』、そして『クリーチャー』が

未だに姿を見せないとは……何たることか！」

「なーにが『何たることか!』つよ! 私は朝がすっごい苦手なのに……」

「と言つてもなああ。小娘、お前だつて敵のサーヴァントの情報は欲しいだろっ?」

「ええ、その通りよ……でもね、あんた街の上空を周っているだけじゃないッ!!」

そんなグルグルグルグルグルグル周ってるだけで見つかる为本気で思つてんのか!？」

「グルグル言うな、うるさいのうう」

ミルクースの文句横暴を一言で返し、何食わぬ顔で持ってきたビールを口へ流し込む。

だが彼女の文句にも一理はあつた。キャスターの探し方は何も使わず、タダ単に神代市の上空を周っているだけで、実際上は何もしていないに等しい。

そもそもミルクースの使い魔がセイバー、アーチャー、ランサー、クリーチャーの居場所を

掴んでいるのに何故こんな事をする必要があるのか……キャスターなりの意見はこうだ。

もし、4つの陣営が『その場所に、本当は立て籠もっていない』としたら?

ありえない話ではない。そういう戦場においての『騙し戦法』も、この聖杯戦争では

十分にありえる。魔術師というものは目的の為なら手段を選ばない

のが当たり前故に、
そういう卑怯とも思える手を使う場合もある。

そういう『ありえる敵側の行動』を予測した上での行動なのだが……

「こんな何もしないで、ただグルグル周ってるだけじゃ無理よ……
何回も言うけど」

「……いや、そうでもないぞ？」

「へっ？　！！ッ」

二人は今、ドランの視界が映し出される絵画の前にある二つのイスに座っており、
実は後ろにもう一つイスがある。ミルキースが異様な気配を感じ取り、

後ろを振り返る。そこには探している4体のサーヴァントの
1人『アーチャー』が後ろにあるイスに腰を下ろしていた。

「しかしまあ、よく見つけられたな？　しかも難なく侵入してくるとは……」

「なに、随分とアホ丸出しの探し方で私たちを探しているので、
此方から出向いてやろうと思った次第でな……生憎、セイバーとラ
ンサーについては
分からぬがクリーチャーとは同盟関係を結んでいる。私達と戦いた
ければ相手になるが？」

「それより我の臣下になる気はないのか？ さすれば…」

「笑止。思い曲上がるのも大概にしろキャスター」

ピンク色の髪をポニーテールにし、甲冑ドレスを身に纏った女性とアーチャーである

『シグナム』は、キャスターの誘いの言葉を自身の言葉で捻り潰した。

「この聖杯戦争で生き残るのは二人のマスターとそのサーヴァント、すなわち『2組』が生き残ることになる。とすれば、それ以外には……消えてもらう必要がある」

シュツ！

ガギイイツ！！

「アーチャーよ。我を狙うのはいいとして、我がマスターを狙うとはどういう見だ？」

アーチャーの長剣『レヴァンティン』の切っ先がミルキースを貫こうとするが、瞬時に

キャスターのザンバットソードがそれを防いだ。

「どういう見…か、これは聖杯戦争でありれっきとした生き残り
をかけた戦いだ。」

マスターさえ取れば、後はどうとにでもなる」

「うむ。確かに一理あるがソレを我が安々と許すと思うか？」

「思わないのは先刻承知、ならば実力行使に甘んじるのみ！」

「フンッ！」

キャスターがザンバットソードに力みを加え、アーチャーの剣『レ
ヴァンティン』を押し返す。

アーチャーは空中で回転し見事に着地する。そしてレヴァンティン
を前に突き出したかと

思えば、刀身が幾多に別れ、蛇のような動きでミルクースに襲いか
かる。

だがキャスターは自らの身体を盾にして庇い、

剣戟を防ぐと同時に刀身の切っ先をガシッと掴んだ。

通常、鞭などの武器は広範囲の敵を一掃出来るというメリットがあ
る。

しかし、一度捕まってしまうえば身動きが取れなくなるという危険性
も孕んでいる。

もっとも予備を持っていれば話は別だが、アーチャーにはそれがな
い。

となればアーチャーの不利は確實のモノとなってしまう、キャスターが有利になってしまう。

アーチャーはキャスターの手から逃れようともがくが、キャスターがそれを認めなかった。

「ぐっ！」

「無駄だ。腕力では我の方が勝る為、振り解く事は出来ない……どうする？」

「中々だな、しかしこれはフェイクだッ！」

「ムッ!？」

そう言うと同時にもう一本の……というより本物のレヴァンティンを出現させ、

フェイクのもう一本を投げ飛ばす。

そしてキャツスルドラン・ハウスの出入り口である扉を切り裂き、外へと身を投げ出した。

すぐさま二人は扉に駆け寄って外を見る。

アーチャーは空中で『飛行魔法』というモノで空中に佇み、自らの宝具である

レヴァンティンを変形させ、真の姿である炎の魔弓『ボークン』と化した。

「なるほど。アーチャーであるのにセイバーのように剣を扱う姿に疑問を抱いたが……
それなら説明もつくというモノだな」

「フツ、私の観察をするのはいいが、早く逃げんと危ないぞ？」

そういつてボーケンを構え、炎で合成された矢を放つ。

矢が拡散すると同時にキャッスルドラン・ハウスのあらゆる箇所に被弾した。

「うわあッ!」

「ぬくっ…ぐッ!」

激しい揺れが二人を襲い、ドランが悲痛の咆哮を上げる。

途端、ミルキースがドランから外へと衝撃によって放り出されてしまった。

それを助ける為、キャスターは飛び出した瞬間マントを蝙蝠の翼のような形状へと変化させ、
ミルキースに手を伸ばす。キャスターの手をミルキースは恐怖に震えながらも取る。

そのまま彼女を抱かかえ（俗に言うお姫様抱っこ）、ドランの下へ戻ろうとするが……

「させると思つか？」

「！！ッ」

その言葉と同時に無数の炎の矢が二人に襲いかかる。

だが矢が直撃する前にドランが主であるキャスターとミルクィスを自分の内部へ

緊急避難させた為、炎の矢の餌食になる事だけは防げた。

キャスターはドランに気絶したミルクィスを預け、再びアーチャーのいる空中へと

身を投げ出すと同時にザンバットでアーチャーを切り裂こうとする。

「うおおおおおおおおおおお！！！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

襲い来るザンバットの刃をレヴァンティンで防いだアーチャーはキャスターの腹部に蹴りをかまし、距離を作る。

蹴られた箇所を摩りながら緑色の複眼でアーチャーを見据えるキャスター。

その雰囲気には中々の敵に会えたという、一種の愉悦感が感じられた。

「中々の戦法だな……ますます我が臣下にしたくなつたぞ！」

「フツ、さつきも言ったが私には仕えるべき主がいる。主ある限り私に敗北は無いと知れ！ キャスター！！」

「おもしろい！」

炎の魔剣と闇の魔剣がぶつかり合い、激しい衝撃波を生む。それを合図にキャスターとアーチャの空中における戦いとその幕を上げた。

聖杯戦争2日目 アーチャーの挑戦/炎の弓兵(後書き)

アーチャーは『リリカルなのは』の『おっぱい魔人』こと

『シグナム姐さん』ですね(笑)

でもなんか……敵に対して挑発的っていうか、何か悪役みたいにな
感じに

なってますね(苦笑)

残るセイバー、ランサー、そしてアーチャーと同盟関係であるク
ーチャーに

については候補はあるけど、まだ考え中です。

ではまた次回に！

【ふどう府堂 たいが對我】

年齢 / 29歳

特徴 / 病人のような雰囲気と白髪、右目が赤、左目が茶色のオッドアイ

説明 / 『魔術戦争』で生き残った4人の偉大な魔術師の1人『府堂当夜』の息子。
府堂家は代々、妖魔や悪霊を使った禁忌の魔術を専門分野とする魔術師の家系で、裏で行われている非道な魔術実験の数々は他の3人の魔術師達には知られていない。
今回の聖杯戦争では義理の妹である『府堂麻衣』を人質に脅迫され、やむなく参加した。

自らの家系が秘密裏に行っている残忍で非道な魔術実験の全貌は麻衣と同様に嫌悪している。
その為に二人で逃亡を図るが当夜によって阻止されてしまい、前述の結果となった。

バーサーカーについては、頼れる良きパートナーだと思っている（時よりバーサーカーが

魔力を大幅に消費させるが……。オッドアイと病人のような雰囲気については自身を強化する為の危険な魔術改造を受けた後遺症のようなもの。

主に妖魔や悪霊を使った召喚術並び、妖術を扱う。

【バーサーカー／竜宮レナ】

特徴／白い帽子に白い服を着た白尽くしな格好

ステータス／筋力A 魔力B 耐久C 宝具B

技能／気配察知スキルB 騎乗スキルC 鬼道D

宝具／『あの日の真実』トゥルー・ザ・トワイライト。例えそれが魂であろうが、

粒子であろうと、手に触れたものすべてを鈍型の疑似宝具へと変換させる能力型宝具。

複数の生成は不可能だが、その変わりステータスが大幅とは言わないまでも上昇する。

もう一つは『絆を紡ぐ蒼き獄炎』インフェルノ・ブル。

これは生前、仲間の世話や揉め事の仲裁、困難な状況を冷静に分析し穏便な善処策を提案する

『青い炎』という役目が一つの現象として宝具となったもの。

その効果はあらゆる対象を蒸発させ消滅させる他、敵サーヴァント

もしくは
マスターの魔力を吸収することができる。

説明/生前は雛見沢と言う田舎町に住んでいた少女で、とある大規模な事件を仲間たちと共に
解決したその功績が認められ、英雄となりその死後は英霊の座へと
押し上がった。

ファイターのサーヴァント『キュアブラック』とは因縁があるらしく、それについては不明。

可愛い物が大好きで、それを目の前にすると『お持ち帰りイイ!』
か『かわあいいよー!』
と、叫ぶ事がしばしある。

マスターである對我には心から信頼しており、あまり彼から魔力を
搾取しないよう
心掛けている(ファイターを見た際や緊急時には、やむ終えず魔力
を大幅に搾取するが)。

聖杯戦争2日目 ファイター陣営の動き／とある密談

アーチャーとキャスターの戦いが始まる数時間前、紫騎と溇。ウォルターに朱熹。

そして拳士のサーヴァント『ファイター』によって構成された『ファイター陣営』は
とあるホテルの一室で集めた情報を元に、今後の方針をどう決めるかで会議を行っていた。

「俺と朱熹、そしてウォルターが集めた情報を整理しよう。」

アサシン、セイバー、アーチャー、ランサーのマスターたちは魔術とは何の関係もない、

これといって目立った経歴のなく聖杯戦争に参加する前は極普通の一般人だったようだ。

だがバーサーカー、ライダーにキャスター……そしてクリ チャーと脱落した

アヴェンジャーのマスターたちは魔術関係者であることが判明した。資料を見てほしい」

そういつて紫騎は目の前に何枚かの資料を置き、ファイターと溇はその資料に目を通す。

そこには魔術関係者である4人のマスターたちの情報が載っていた。

「これは……かなり細かく記載されていますね、マスター」

「まあ、情報っていうのはそういうもんさ。より正確、そして細かく得ることに意味があるんだ。大雑把で不確かな情報は戦いにおいては役に立たないもんだ」

「でもこれだけの情報が揃えば、今後の方針も決められるわ」

「漣の言う通りだが、これだけでもまだ足りないんだ。マスターに
関しての情報は

根こそぎと言っていていい程あるが、肝心のサーヴァントの情報が少ない……

とくにセイバー、アーチャー、ランサー、クリチャーの情報が
出揃っていないのが痛い所だ。もう少しサーヴァントに関しての
情報を集めた方がいいな」

紫騎はそう言い、ファイターにある質問をしてきた。

「ファイター。君はアサシン、ライダー、キャスター、そしてバ
ーサーの

中でどれを最初に倒した方がいいと思うんだ？」

「断然アサシンでしょう。ライダーは騎乗者のサーヴァントであり
ながら、

アーチャーのような遠距離からの攻撃が可能です。しかもあの無数の
剣の

一本一本がとてつもない威力を宿し、まず簡単には倒せないでしょ

う。

キャスターの場合は魔術師のサーヴァントなのに剣術を得意とします。

あの剣戟から見るにライダーと同等の力量であるのは明確です。

しかもどういった魔術を有するのかが分からない以上、迂闊な行動は控えるべきです。

そしてバーサーカーはライダー、キャスター共に剣術を得意としますが動きがほとんど

我流の剣筋で見切るのは不可能に近いと思われます。

しかもかなりの腕力を有するどころか理性をもっています。ライダーの宝具を難なく

かわしている所を見れば、相当厄介です。最後のアサシンに関しては魔術に似た

奇妙な術を使い、魔力を食らう宝具『鮫肌』をもっています。しかし、その厄介な

宝具の能力を封じる手段はありません。それには私が持つ『もう一つの宝具』が必要不可欠です」

その顔には自信に満ちた笑みを浮かばせており、躊躇いも戸惑いも存在しない、

自分自身への信頼から成るものだった。

だが根拠と証明がなかった。昔の紫騎なら根拠も証明もない言葉を信じることは決してなかったが、今は違う。

紫騎という人物は平和と秩序を追い求め、多くの人間を救う為に

少ない犠牲を払ってきた。

それは残酷で卑劣な方法であり、決して誇れるものではない。これは実際にあった話だが、ある小国が別の小国の侵略行為によって苦しみと嘆きに晒され続けていた。

毎年多くの人々が死んでいく小国の為に紫騎はあらゆる手段、戦略をもって侵略行為を行っていた小国と

戦い、その小国の兵士や国民を必要とあらば虐殺した。兵士の中には8歳から13歳の子供もいた。

だがその少年兵を、紫騎は殺した。両手に持った一丁のマシンガンを使って……………。

そんな自分に絶望する毎日……………そんな中で彼は聖杯戦争という魔術師同士の殺し合いを知った。それがどんなに過酷な戦いか知った上で彼は参加し、

その為に戦う覚悟も既にできている。

聖杯戦争が開始されるまでの一年間彼は一つの決意をその胸に宿らせた。

『聖杯戦争を通して、自らを変えていく努力をしよう…』

…今度は誰も犠牲にすることなく、必ず勝利してみせる』と。

それから彼は変わった。

外見ではなく内面が変わった彼は今までの

雑念や重荷を少しばかり下ろしたような雰囲気醸し出していた。

ファイターの根拠も証明もない言葉を何も言わず、信じられると思っただのも

おそらくそれが要因であつただらう。

「わかった、最初に落とすべき敵の陣営はアサシン陣営。これに関して異議はあるか？」

「……………」

「ないな……………では当面、アサシン陣営の動きを何から何まで調べ上げていき、アサシン殲滅の作戦を立てよう。そして大変だとは思つが朱熹、オルターは、他の敵陣営の情報を今あるのよりも倍の数の情報を集めてくれ」

「はい……………」

「わかりました」

紫騎の指示にウォルターと朱熹は承諾し、同時に頷く。そして紫期は視線を2人から澪とファイターに移した。

「ファイターは今後、澪の護衛をしてほしい……………できるな？」

「待って下さい。それではマスターはどうするんですか。もし、万が一でも敵のサーヴァントに出くわすなんて事態になつたら……………」

「心配は必要ない、何故なら俺にはこれがあるからな」

そういつて紫騎は足元に置いていた黒く横幅が長いアタツシユケ―スを全員が囲んでいる
テーブルの上に上に置き、その中の物を取り出した。

黒いアタツシユケ―スの中に入っていたものは一本の剣…刀身は黒一色で塗り潰され、剣柄の部分と
剣格部分は血のように赤く刺々しいデザインとなっている。

しかもこの剣から発せられる魔力は尋常なものではなく、それこそEXランクの宝具に

匹敵するだろう。漣と朱熹とウォルターは漆黒と深紅の剣が何なのかを知っているが、

初めて見たファイターは分からずといった様子ようだ。

そんなファイターに紫騎はこの剣についての説明をした。

「この剣の名は『ブラッド・ルシファール』。聡明で偉大な……そして俺の恩師である真祖の吸血鬼
『ルシフェル・フォン・シツクザール』が長い月日を賭して創り上げた神秘の概念武装だ」

「………ということとは………ソレは宝具なのですか?!」

「ああ。シツクザール師が俺の為に託してくれたもので、あの人の形見だ」

ファイターは紫騎の言葉からシックザールという人物が既にこの世にはいないと悟り、
追及をやめ改めて漆黒と真紅の剣を見据える。まさにすべてを吸い込むかのような
秀囲気を漂わせ、近くにいただけでもすべての魔力を根こそぎ持つていかれるような
感覚を覚え、思わずファイターの体が身震いを起してしまった。

「この剣の能力は『魔喰らい　ダークネス・イター　』、魔術師にとっては
天敵とも思える力だ。それに魔術どころか第2、第3の魔法さえ喰らってしまうからね、
この剣は」

「第2、第3の魔法を喰らう!?　そんなこと可能なのですか!」

「まあ、信じられないのも無理はない。大昔に存在し今は完全に失われてしまった第2、
第3の魔法の再現は多くの魔術師にとって『根源への到達』と同じくらい最大の目標だった。
最大の目標であると同時にそれが一片の誤りなく完全に再現することができるのなら、さぞ強大な
力である筈だ。それを喰らってしまうのだから……いろんな意味で恐ろしくもあり、頼もしい」

紫騎はブラッド・ルシファールをしまい、改めて全員を見据える。

「さて…それじゃあ始めるとしよう。聖杯戦争を勝ち抜く為の『経緯』をな」

騎瑠亜、君から見てファイター、キャスター、アサシンの3体はどの程度の物なんだ？

結論からいってキャスターが一番厄介と言えます。無論、確かにファイターとアサシンも一筋縄でいかないでしょう。しかしステータスとあの見事な剣術の力量は魔術師のクラスに据えられたサーヴァントとは到底思えません。今後において厄介な敵となる筈です

ライダーのマスター 蘆夜土岐臣とアヴェンジャーのマスター 騎瑠亜は、互いに遠く離れた拠点から念話術と呼ばれるテレパシーのような魔術で

会話しており、その内容はファイター陣営の紫騎たち同様今後の方針を模索していた。

ならバーサーカーはどうだ？ 君の報告によればライダーの宝具を余裕に回避し、

しかも理性がある上ファイターを討ちかけたらしいじゃないか。それについての君の意見は？

バーサーカーも確かに厄介ではありません。あるいはそれ以上ということも

考えられますし、迂闊に手を出せば噛まれる程度では済まないでしょう……何より情報が

少なすぎます故、多くの情報を集めた方がいいかと

なるほど……やはり情報が必要不可欠か。ちなみにアヴェンジャーの存在は

他のマスターに気付かれてないだろうね？

ご心配なく。アヴェンジャーの存在に気付いたマスター及び

サーヴァントの存在は確認されていません。なので心配する必要は皆無と言っていいでしょう

騎瑠亜の自信に満ちた言葉に土岐臣は『ふむ』と頷き、改めて自分の弟子の優秀さに絶対の期待と信頼を抱いた。そして騎瑠亜に新たな指令を出した。

騎瑠亜。できるだけ多くバーサーカ並びキャスターの情報を集めてほしい。

邪魔をする者は隠密に速やかに排除し、今後ともアヴェンジャーの

存在を

感づかれるな……計画の一片でも狂いが生じれば勝利への道は遠のいてしまう。

いいな騎瑠亜？

分かりました、土岐臣師。ご武運を…

騎瑠亜がそう言うと同時に念話術は切れ、それを確認するとすぐさま自分のいる土岐臣別邸の自室へと向かった。そこに1人の男のサーヴァント……銀色のシヨートヘアに緑色の瞳をしたラフな格好のライダーともう一人、七人いるアヴェンジャーの1人で、黄色い王族のドレスを身に纏った傲慢のサーヴァント『リリアンヌ』が向かい合う形で二つのソファアーに座り、ワインを飲んでいた。

「あら、遅かったわね騎瑠亜。待ちくたびれたわ」

「リリアンヌ、貴様他のサーヴァントの監視はどうした？」

鋭い視線をリリアンヌに送るが当の本人はそれを意に介さず、めんどくさそうな表情で騎瑠亜に告げた。

「ちょっとした休憩よ。あたしには暗殺者みたいな根暗仕事は向いてないしね」

「はあぁ……………」

呆れて物も言えない騎瑠亜に、ライダーごと、シャドームーンは空いたグラスにワインを注ぎ
騎瑠亜の前に置いた。

「そついきがるな騎瑠亜。まあこれでも飲め」

「……………私の酒なのだが……………」

小声でそう言い、もう一つの1人用のソファーに座り注がれたワインを飲み干す。

「それで？ 一体どういった理由で2人が私の自室でワインを飲んでいるんだ？」

「なに。こいつとなかなか気が合ってたな……………それで今に至るといわけた」

「……………本当にそれだけか？」

「……………クツクツ、どうやら誤魔化せんようだな。ならば率直に問おう」

ライダーの妖しい笑みが一層強まり、そしてその口から発せられた言葉に騎瑠亜はその顔に驚愕を宿すことになる。

「今の俺のマスター……蘆夜土岐臣を殺し、俺をお前のサーヴァントにする気はないか？」

聖杯戦争2日目 ファイター陣営の動きノとある密談(後書き)

新年明けましておめでとございます!!

今年も大変だけど頑張つてこの作品を書いていきたいと思ひますので、

応援よろしくお願ひます!! それではまた次回に!

聖杯戦争2日目 とある密談・続ノ弓兵と魔術師の決着

ライダーの言葉にその顔を驚愕に染め上げてしまふ騎瑠亜だったが、すぐに表情を険しいものへと変え、まるで鷹の様な怒気の含んだ鋭い眼差しをライダーに向けて言い放った。

「そんな悪質な世迷言や寝言は私の前で言うな。不愉快極まりない。そもそもこの私が土岐臣師を殺すと思っっているのか？ だとしたら妄想も甚だしい」

「妄想、世迷言、か……随分な口を叩くなあ騎瑠亜。だが許そう。本来なら俺に逆らう者は1人残らず潰すのが流儀……しかしお前は別だ」

ワインを傾け、その味を楽しみながら騎瑠亜を見据え、空になったグラスをテーブルの上に置き、ビンの中に入ったワインをグラスへと注いだ。

「興味が湧いているのだ、お前と言う人間にな」

「理由は？」

鋭い眼差しを消さず、騎瑠亜はそう問いかけた。

ライダーも悠然とした雰囲気消さず騎瑠亜の問いかけに答えた。

「今、この瞬間も満たされているのにまだ足りない……という顔を

常にしているんだよ。

強欲な人間なんてのは五萬といるものだが、お前の欲望は異常過ぎる。

だから興味があるんだよ」

「馬鹿な事を言うな。私は生まれてから今までの間、人としての情熱、

悦楽、目的意識というものを持ってなかった。だが魔術に出会い私のすべてがその瞬間から

変わった。かつて生き甲斐を得られなかった私が『魔術』というものに魅了され、初めて

それらを得る事が出来た…そしてその魔術を教えて下さったのが土岐臣師だ」

「ふむ。だから土岐臣を殺さず、聖杯も求めないか？」

「そうだ」

騎瑠亜淡々とそう答える。それに対しライダーはワインの入ったグラスを一旦置き、溜息を漏らす。

「騎瑠亜……やはりお前は何も分かっていない」

「何だと？」

「お前は満たされていてはまだ足りない、されどその『足りないもの』が分からない。

故に本当は無意識に分かっている筈なのに何故か否定をする。ならば問おう騎瑠亜。

お前は本当に満たされているのか？ 満足しているのか？ 絶頂の

喜びを味わっている」と

「……………」

自らの腹の中を覗き見るような、それでいて猛獣のような、厳格さを孕んだ視線で

騎瑠亜を見つめるライダーに彼は即答する事ができなかった。

表面上では満たされているように装っても、事実その内面は満足し
いなかったと言って

いいだろう。むしろ『何か』をひたすらに求めていた。ただそれが
『魔術だけでは足りない』

という理由ではなく、『今の魔術における成果だけでは足りない』
と思いたかった。

もし『魔術だけでは完全に満たされない』と分かってしまったのなら、

自分はその頃に戻り、絶望する毎日を送るしかない。『心の虚無感
と魂の空虚感』という

恐怖と苦悩を味わう日々へと……他人はどうであるかは分からない
が、少なくとも騎瑠亜に

とってそれはあまりに地獄のようなものだ。

だから認めたくなかった。『今の魔術における成果』に足りないと感じ
ているだけなら

更にそれを求めていき、その過程で更なる情熱と探求を味わう事が
できるだろう。

だが『魔術だけでは足りない』なら、探求心を湧き起こさせる興味
も、その過程の

情熱も何もかもが無くなってしまふ。そして聖堂教会に属していた

頃のような

『虚無』そして『空虚』という地獄が待っている。

「……………私は……………」

「騎瑠亜。まだ足りないと言き叫ぶその魂を鎮める為には、
蘆夜土岐臣を殺してこの聖杯戦争を勝ち抜いた上で、聖杯を手に入
れなければならぬ。

あの願望機がどのようなものであれ、お前の心を満たしてくれるの
ではないか？」

「……………」

「創世王たるこの俺が、これだけ説法をしてもまだ悩むか。
しかしいいぞ、その苦悩する姿はまさに見物……………だがその苦悩を押
しのけ立ち上がり、
新たなる道を進んでいく『人』としての在り方をこの俺に見せてく
れば、もつといいのだがな」

「……………もし聖杯を手に入れられたとして、聖杯は私のこの心と
魂を
満たしてくれるのか？ 生き甲斐や自らの在り方を変えてくれるの
か！！」

「俺にそのようなつまらん事を聞くな、劣等種」

ライダーは不愉快さを顔に現しながら手に持ったグラスを放り投げ、
壁に激突した。

中に入っていたワインは無残にも床や壁に飛散しているが、ライダーはそんな事など

気にせず、ただ自分が見据えている男騎瑠亜に

「騎瑠亜。それが盟友や自らの命を賭けるに値する者達の言葉なら多少の助言を

聞き入れるのもいいだろう、しかしな。所詮俺達の関係は『利害一致』だけの関係に過ぎない。

そういう関係の者なんぞの答えなど意味が無いし、何より無価値だ。しかしお前にはそういった

者達がいないのであるう？ならば自分の眼で見極め孤独に己が望む道を進んでいくしかない。

少なくとも生前の俺はそうやってきた。唯一無二の盟友がいたがその友が死になくなった

その時、俺はただ己の信じる道を貫いた。ただ孤独に……な」

「……………」

「答えは次の機会に聞くとしよう。それまでに己で考え、答えを見つけるといい……」

俺はいつでも待っているぞ」

ライダーはそう言い霊体化し騎瑠亜の自室から去って行った。

沈黙が黙々と支配するその場の空気を打ち破ったのは、今まで黙って会話の様子を見ていたリリアンだった。

「そんなに悩む事なの？ 自らを救ってくれた恩師をその手にかけて、ただ願望のままに

成敗を手にする事が貴方にとっては苦惱でしかないかの？ 貴方も難儀な人ね」

「アヴェンジャー・リリアンヌ。早く自らの任に戻れ……答えに
ついては
いずれ教えてやる。それまではちゃんと己の任をこなしていき、最
後まで全うしろ」

苦悩を浮かべる顔を消さず、苦し紛れに命令する騎瑠亜に悪戯を含
んだ笑みを浮かべ
霊体化しながら去って行った。残された騎瑠亜は少しだけワインの
入ったグラスを傾け、
独り言を零しながらグラスを見つめた。

「今の私は……このワインが少ししか入っていないグラスと同じだ。
魔術という微量のワインだけではグラスと言う器は満たせない。そ
れを知ってしまった今、
私は……恩師を裏切るしかないというのか……」

その問いに誰も答えず、ただ虚空へと消えていった。

時間を現在に戻し、キャスターとアーチャーは街から離れ『神代湾』
という海の上空で

激しい戦いを行っていた。もう2時間も経っているが二人に疲れはまったく見えない。むしろ逆に燃えているような感じだ。

キャスターはダークキバを装着してザンバットを振っており、それに対してアーチャーはレヴァンティンを剣の姿から弓の姿『ボーゲン』へと変形させ炎の弓矢でキャスターを射抜こうとする。迫り来る炎の弓矢をザンバットソードで斬り捨てるキャスター。

やがてこのままでは無意味と悟った二人は必殺奥義での決着に望んだ。

「我が炎の魔弓よ！ その不死鳥如き情熱の獄炎もって敵を焼き尽くせ！

『フェニックス・レーヴァ 不死鳥の刃』！！」

「我が皇帝の剣よ。その暗雲なる闇と対なす輝きを以ってして、我に勝利を！！

『ザンバット・ブレイク 皇帝の栄光斬』！！」

ボーゲンから不死鳥を象った焦熱の一撃が解き放たれ、ザンバットからは栄光の光による強烈な一撃を繰り出す。やがてそれらがぶつかり合い爆発し、凄まじい衝撃波を生んだ。

そして必殺奥義の打ち合いに勝ったのは……………

「ぐわあぁッ!!」

アーチャーだった。炎の不死鳥を斬り裂き、アーチャーの両肩を斬り去ったキャスターの必殺奥義『ザンバット・ブレイク 皇帝の栄光斬』はそのまま胡散して消えていった。

両肩から大量の血を撒き散らしながら、今はもう廃墟と化した人工島へと墜落し、その際の衝撃でかなりのダメージを負ってしまった。

「グッ……ウウウッ……!!」

何とか身体に力を入れて立ち上がるうとするも、

衝撃の際と両肩の傷によるダメージで動かすことができなかった。

「……まさか……キャスターと真っ向から純粹に競い合って敗れるとは……」

ハッ！ 騎士とあろうものが……慢心で……油断……したか……ハア、ハア、ハア、ハア」

そう言いながら自分の下へゆっくりと降下するキャスター。

無機質な足音が響き渡りアーチャーの耳へと入っていき、

その度に死への招きが近付いている事を把握する。

やがて彼女の瞳にダークキバを解除したキャスターの姿が映る。

その手にはザンバット、それが自分の命を刈り取る死神の鎌になる

だろうと

アーチャーは思った。そんなアーチャーにキャスターは再び誘いの言葉を紡いだ。

「アーチャーよ。お前のような素晴らしい騎士を死なすには惜しい……故に我が軍門に下る気は本当にないか？ さすれば我はお前を殺さず、生かすことが出来る」

「……甘いな……キャスター。お前には分からないかも知れないが……騎士というのはな、一度忠義を尽くすと決めた主を捨てるなどしない。もし主に裏切り行為を行ってみろ、もはやその時点で騎士ではなく、ただの恥晒しの愚者だ……」

まるで嘗て自分がそうであったと言いたいような口ぶりで話すアーチャー。

キャスターはその様子に悲しげな表情を浮かべ、そのザンバットの刃を

アーチャーの胸に突きつけた。

「真に惜しい……容姿もまたそうだがお前の忠誠心は美しい……これ以上の勧誘は

お前への冒涇と侮辱になるだろうから、この一撃で終わらせる」

そう言いザンバットを彼女の心臓に突き刺そうとした直後、

「……………ッ!!」

野獣のような咆哮が響き渡り、それが衝撃波となつてキャスターを吹き飛ばすと同時に

霧のような熱い蒸気が人工島全体を覆い隠し、キャスターの視界が奪われる。

数分後に蒸気は消え去るが、それと同時にアーチャーの姿が無いことに気がついた。

倒れていた部分には生々しく血が残っており、それ以外の痕跡はなかった。

「確かアーチャーはクリーチャーの陣営と手を組んでいたと言っていたが……なるほど。」

助けに入った、ということが……まったく以って頼もしい仲間も得たものだなアーチャーは」

そう言つて笑みを浮かべるキャスター。その後、キャッスルドラゴンと共に迎えに来た

ミルキースに数時間の説教を喰らつてしまふことになるが……

お知らせ

現在、XXXが執筆している『Fate/Crossover』ですが、
本日を持って凍結にさせていただきます。

理由に関しては、Fate/zeroをベースに物語を自分なりに
アレンジしていたんですが、
改めて自分で読んで見て『アレンジしてるにしてもFate/zero
を意識しすぎだな』
と思い、この小説の改変を決めました。ストーリーや設定、その他
諸々変えるつもりです。

今までこの小説を読んで下さった皆様には大変失礼だとは思いますが、
どうかご了承下さい。

では、『Fate/Crossover』の改変版、
『Fate/Crossover/knight』の予告をどうぞ。

それは、――――

万能なる願望機を巡る――――

『運命』と言つ名の――――

『闘争』だ。――――

『こんな俺だけど、力を貸してくれないか？』

その身に、ありとあらゆる異能力を打ち消す『異能殺し』を宿した1人の男『上林 恭耶』

『それがマスターの意志であるのなら、私は貴方と共に行きます！』

漆黒の装束に身を包み、黒き稲妻を操る『ファイター 格闘士』の
サーヴァント『キュアブラック』。

『この私が君に教えて上げよう、聖杯戦争という殺し合いを……』

。自らが目指す『万物の根源への到達』を野望に秘める男『蘆夜清雅』

『この俺に歯向かう者は、死ぬ覚悟を決めた馬鹿か。もしくは相手の力量を計らえない
三流の大馬鹿者、というのが相場なんでな』

生前において、ありとあらゆる富と力。すべてを支配下に置き、自らが時代を創り上げた
最強のサーヴァントにして『ライダー 騎乗者』のクラスを持つ、
創世王シャドームーン。

『私の願いは、あの人の救済…』

たった一人の愛すべき人を助ける為、聖杯戦争と言う殺し合いに興
じる少女『美樹さやか』

『あたしはね、聖杯なんてガラクタに興味は無いんだよ。
ただ、あいつの願いを叶えさせたいだけなんだ……その為に、お前
にはここで死んで貰うぜ!』

さやかを守る魔法少女の『ランサー 槍兵』のサーヴァント、佐
倉杏子。

『こんな事したくはないんだけど、私自身の運命を変える為に貴方
達を討たせて貰うよ』

自らの悲惨な結末を変えようとする魔導師のエースにして、
『アーチャー 弓兵』のサーヴァント『高町なのは』。

『人間っていうのはね、眼に見えなくとも、そこにある真実を信じようとしないうるんだよ』

『人』である事を捨てようとする異常者にしてサディストな女性、
鞍馬 佐苗』

『その命を我がマスターが欲してるんです。だから獲らせてもらいますよ、貴方の魂を！』

人間を辞めようとしている異常者のサーヴァント、『アサシン 暗殺者』の『鬼鮫』。

様々な欲望と信念――――

そして切実な思い――――

それらが交差していき、重なり合った時、――――

この物語は……いかなる方向へとその進路を変えるのだろうか――

――――

『Fate/Crossover/knight』始動！ 本日『
1月10日』公開予定！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3727z/>

Fate/crossover

2012年1月10日08時47分発行